

ハイスクールD×D ライダーの力を持つ者 改

自宅警備員候補生

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある日銀行強盗に襲われている親子を助けて死ぬが神に認められて転生を果たした三日月大河。

特典に貰った力をもってハイスクールD×Dの世界で何をなす。

これは前作のリメイクです。

## 目次

設定	1
転生するようですよ!? その1	5
転生するようですよ!?その2	10
転生するようですよ!?! 最終	16
ハイスクールD×Dの世界に転生しました その1	20
ハイスクールD×Dの世界に転生しました その2	25
特訓&勤務	28
特訓&勤務 その2	33
学園いる悪魔との邂逅	37
原作への道	40
始まり	42
加速	46
リンクス・ゾディアーツとの戦闘	49
接触と火蓋	52
クレセントの力の片鱗	57
成立と三度	61
メモリと会談	65
創造と力	70
会談開始	76
第20話	84
決着と撃破	87
第22話	93

## 設定

### キャラクター設定

三日月 大河《みかづき たいが》・・・この作品の主人公。銀行強盗に襲われそう になつていた親子を助けて死んでしまったが、生前の行いを神々に認められハイスクールD×D の世界への転生をはたす。生前仮面ライダーに憧れを持っていた為転生特典を「仮面ライダーに変身」にする。

### 転生特典

仮面ライダーに変身：・特典の一つで、その名の通り仮面ライダーに変身出来る。変身する仮面ライダーは神が考えたモノ。

仮面ライダークレセント・・・主人公の望んだ特典を叶えるために神が考えたライダー。その能力は仮面ライダーディケイドと仮面ライダーディエンドの二つの能力（全てのライダー、サブライダーを含めに変身及び召喚出来る）と強力で有るが強力で有るが故にその分制限がかかっている。カードを使い色々なものをする。クレセンバイザーにカードを装填してその能力を使う。

### クレセンバイザー

カードを装填するための道具。基本は龍騎のように左手首についている。ソード、ガン、アックスの三タイプに変形する。

### 能力にかけられた制限

1、一度会ったことのある、闘ったことのあるライダーのみ変身及び召喚が可能  
2、ハイスクールD×D の原作にもライダーに変身する適性があるため探し出す。

3、ブランクモード、ノーマルモード、ライダーモード、ラッシュモード、バーサークモード、ソードモード、ガンモード、アックスモードの八つの形態がある。  
ブランクモード

### クレセントの初期形態

ステータスとしては兵士三体分（能力イメージは仮面ライダー

電王のプラットフォーム)

フォームイメージはプラットフォームに近い

ノーマルモード

クレセントの形態の一つ

ステータスは、全体的にみて他の形態より低いバランスが一番とれている形態(イメージとしては仮面ライダーカブト達のようなマスクドフォーム)

フォームイメージはカブトマスクドフォームに満月の装飾

ライダーモード

クレセントの通常形態

ブランクモードの二倍近くのステータスを持っているがスピードを重視している。(イメージとしては仮面ライダーカブト達のようなライダーフォーム)

頭部に三日月型の装飾がある。(イメージは仮面ライダーメテオの三日月版)

身体部分は仮面ライダーディケイドのような感じでライン部分が赤ピンクではなく黄色

ステータスとしてはディケイドと同等

ラッシュモード

ライダーモードが速さと手数を重視したモード。防御能力と一撃の威力を減らすため戦闘には時間を要する。ラッシュモードになると手にグローブ状のオーラを纏う。

バーサークモード

ライダーモードが攻撃力を重視したモード。威力や速度がはやくなるが防御能力を0にする。攻撃力が20倍になるが自我を失いかける為敵味方関係無く攻撃するようになる。

ソードモード

ライダーモードがクレセンバイザー(ソードタイプ)を装備したモード。若干戦闘狂気味になるのが欠点。

ガンモード

ライダーモードがクレセンバイザー(ガンタイプ)を装備した

モード。ノーマル弾、麻酔弾、聖弾、魔弾、龍殺し弾など様々な弾丸を使い分ける。

アックスモード

ライダーモードにクレセレンバイザー（アックスタイプ）を装備したモード。攻撃能力、防御能力があがるが速度が格段に下がる。

兵藤一誠・・・基本的原作通り。りゅう座のアストロスイッチの適合者。進化する仮面ライダー龍騎になる。力にのまれるとリュウガになってしまう。禁手に至ると龍騎に変身が可能。覇龍後はリュウガになり敵味方関係無しに攻撃をする。真紅の赫龍帝後は龍騎サバイブに変身可能に。それ以降は自由に龍騎、リュウガ、龍騎サバイブに変身できる。ドラグレッダーはドライグがつとめる。そのためアドベントではドライグが出てくる。ドライグは一時的であるが実体を持つことが出来て喜んでいる。きつかけはライザーとの戦い前に主人公からアストロスイッチをもらう。レーティン ゲーム時に一度ドラゴン・ゾディアーツに変身。婚約発表での一騎打ちで一時的に龍騎に。その後は龍騎ブランク体になれる。赤龍帝の籠手の所有者。途中からエロが少なくなる（かも）

ヴァーリ・ルシファア・・・基本的原作通り。ケツアルコアトルスメモリの適合者。進化ナシ。ケツアルコアトルスメモリを白龍皇の鎧の宝玉にさせば一時的にアルビオンの実体化が可能だが、その力は消費する魔力によって変わる。その間は白龍皇の光翼は使えるが白龍皇の鎧は使えない。

アーシア・アルジエント・・・聖母の微笑みの所有者。白鳥座のアストロスイッチの適合者。進化すると仮面ライダーファミンになる。レーティングゲームやコカビエル戦などで守られているだけの自分を嫌い、自分の身ぐらい守れるようになりたいと思い主人公に特訓を秘密につけてもらう。その後の駒王協定でギヤスパアが襲われたことによりキグナス・ゾディアーツに覚醒。ロキ戦にてファミンになる。

木場祐斗・・・基本的原作通り。魔剣創造の所有者。馬の特質を

備え、騎士のような 姿をしているホースオルフェノクの適合 者。一度死にかけているのと主人公から 貰ったメモリが影響しホースオルフェノク になる。スペックは555時並の力を持っているがほとんど出せていない。サイラオーグ 戦にてホースオルフェノクの武器である魔 剣ホースソードと巨大な盾を出せるようになる。その後仮面ライダーオーガになる。

匙元士郎・・・基本的原作通り。黒い龍脈 他ヴリドラ系神器の所有者。若手悪魔顔合 わせ時の夢を語るときの匙に惚れた(あつち系じゃないよ)主人公からアストロス イッチをもらう。兵藤一誠との戦いにてラ イオトルーパーに覚醒。その後ロキ、アガ レス、英雄派などの戦いで仮面ライダー デルタに変身。

塔城小猫・・・基本的に原作通り。オリジナルライダーである仮面ライダーリンクスになる。リンクス・ゾディアーツと契約し仮面ライダーリンクスに変身する。

転生するようですよ!!? その1

なにも無き真っ白な空間。

ここは死者の中でも選ばれし死者の魂のみ が来 ることを許される神界にある特別な空間。

神に認められし者、神と契約し者、人間界 で多くの人を殺めた者、様々な特別な者が ここにくる。

今一つの死者の魂がここにやってくる。

この死者は何をなし神に認められたのか…。

side????

今俺は何も無い真っ白な空間にいる。

(確か俺は銀行強盗に遭遇してその銀行強盗 に襲 われていた親子を庇って!あの親子は 無事だったのか!)

「安心してください、貴方のお陰である親子共 にケガひとつ無く無事ですよ。」

(そうか、助かったのか、よかった。… ン?俺は 誰と話していたんだ?)

親子が無事であることに安心したが誰と話 して いたのかに不思議に思う。

「私です。今姿を現しますね。」

その言葉と共に俺の目の前に目映い光が放 たれて一人の女性が現れる。

今までの人生の中で一度も見たことの無い ほど に綺麗で美しい女性だった。

「貴方のことを待っていましたよ、三日月 大河。」

「な、何故俺の名前を知っているんだ。俺 とあ んたは初対面のはずだ。」

目の前の女性が俺の名前を知っていることに疑問をもつ。

「知っていますよ、今までの貴方の行いを 見させて貰いましたから。」

「見ていた?あんたは一体何者なんだ?」



「そうですね、私は死者の案内を務める者です。よ。貴方たちの世界で言うところの神に当たりますかね？」

神、その言葉を理解することは出来なかった。俺は無宗教だし、奇跡とか運命とか信じてないし、何よりも神という非現実的な存在がふたし、かであるモノを信じてないからだ。

「神、か。」

「はい、貴方達で言うと。」

「そんな神なんかいるわけないだろ。あくまで人間の考えた空想上の存在だろ。神がいるなんて証明されていないからな。貴方が神である」と証明出来るのか？」

「証明ですか？出来ると思いますよ。」

「なら、証明してくれ。」

俺がそう頼むと神は目を閉じて、光を放ちながら背中には白く汚れない美しい翼を、はやし、頭の上にはよく天使等に描かれることの多い光輪をだした。

「どうですか？これで証明したことになりませんか？」

未だに驚きが抜けていない状態の俺に神がきいてくる。

「あ、ああ。とりあえずあんたが人ではない存在だということは理解した。そして、翼や光輪をもっていることから天使、神のどちらかといふことを考え、本人が神といつているからあんたを神と認めざるを得ない。」

あんなモノを見せられても疑うほど俺はバカではないからな。「そうですね。では三日月大河。貴方が私を神であると理解したところで本題にはいつてもいいかしら？」

「本題？」

「ええ、貴方が無くなった後に此処に来たことは理由がありますから。」

本題か、一体本題とは何なんだろう？

「その本題について教えてくれないか？」

「構いませよ、貴方に説明することが私の役目ですから。でした

「何から説明したらいいでしようか？」

「複数か、だとしたら一番初めから聞く方がいいな。」

「この一番初めから教えてくれないか？」

「いいですよ。まず今私達のいるこの場所について説明しましょうか。今私達のいるこの場所は神に認められた死者の魂の来る場所。私たちは転生の間だといっています。」

「転生の間か、これはもしかしたらアレなのか？」

「神の言葉に俺は一つの考えが頭をよぎった。」

「この転生の間では神に認められた死者の次の人生、即ち来世について定める所です。」

「きたー！ー！ー！」

「俺は心のなかで大きくガッツポーズをした。」

「ということは俺は何処か別の世界にいくつてことですよね？」

「嬉しさのあまりに口調が少しおかしくなる。」

「ええ、おおざっぱに言うんですけどね。貴方には貴方が生前に読んでいた小説からハイスクールD×Dの世界に転生していただきます。」

「……………」

「今神様は何て言ったのだろう？ハイスクールD×Dの世界だつて？あの死亡フラグが満載でお馴染みの？」

「ハ、ハイスクールD×Dの世界にいくの？俺が？」

「はい、ハイスクールD×Dの世界に転生していただきます。」

「は、はは、ははははは」

「転生できるという喜びから一転俺の気持ちは最悪になった。」

「(転生できるのはめっちゃ嬉しいんだけど、その転生する世界が…あれだ。)」

「ハイスクールD×Dは可愛い女子キャラが数多くいて、確かに憧れるせかいなんだよね、でもいざっハイスクールD×Dの世界へ！ってなると最悪としか思えない。原作早々主人公が死ぬしそういうのも死亡フラグが満載だからな。」

「それで、貴方が転生するに当たって我々神界から貴方へ特典が与え

られることになりました。ハイスクールD×Dではいつ死んでもおかしくないから、特別処置がとられたの。」

「と、特典。それって二次小説なんかによくある…あれ?」

「ええ、でも二次小説にあるような凄いチートは中々ないわよ。あつたとしても制限がつくわよ。」

「制限っていったいなんだ?」

制限しだいでどんな特典にするかを考えないといけないからな

「例えばですね、悪魔の実つてありますが、それにつけられる制限は海楼石が転生する世界にはありませんので変わりとなる弱点がつきます。水に弱いだけではなく、時間制限をつけたり、有効範囲を定めたりしてます。」

(そういった系の制限か、そしたら俺の望む特典は可能だな。)

俺は小さい頃からの夢でもあるのを特典として頼もうと思ってるから制限について確認した。

その事を考えて俺の望む特典はいけると思った。

「では、三日月大河、特典を決めましたか?」

神が俺にたずねてくる。

「ああ、決めたぜ、俺の望む特典は仮面ライダーに変身する、だ。」

俺の子供の頃からの夢であり、憧れだった仮面ライダー、それに変身したいから俺はこの特典を望んだ。

「仮面ライダー、ですか。それはどの仮面ライダーを指しているのですか? 主役ライダー? サブライダー? 様々なライダーがいますがどの仮面ライダーですか?」

俺はカブト、メテオ、ブラックRX、電王が好きだが、俺の望むライダーは違う。

「俺の望むライダーはオリジナルライダーだ。今までに出てきたことのない仮面ライダーに変身したい。」

「オリジナルライダーですか、ん? そうえば確かアレがまだ有ったはず……。三日月大河、少し待っていて下さい。すぐに戻りますから。」

そう言う猛スピードで何処かに走りだしてこの場からいなくなつた神。

「…………どゆことなの？」  
残された俺の声が何もない空間に響く…。

トントントントン

「……遅い、神はまだ来ないのか。」

あれから体内時計で30分ぐらい経過したがいつこうに神が戻ってくる気配がない。

神は直ぐ戻ってくるって言ったのに全然戻ってこない。

「あの神は一体どれだけ待たせたら気が済むんだろ。」

もう待つことに飽きてきたころにようやく神が戻ってきた。

「すいませんでした。三日月大河。待たせてしまいました。」

「いや、別にそこまで待つてないけど。全然気にしてないし、全然。」

皮肉気味に神に言うが神はスルーして話を続ける。

「そうですか、なら気にしません。それで待たせた理由ですけどコレを取りに行っていたんです。」

そう言いながら手に持っていたベルトを見せてきた。

「コレはオリジナルのライダーベルトです。」

これが俺とベルトの初めての対面だった。

## 転生するようですよ!?!その2

(…えっと、一体何時までこの状況はつづくんだよ。)

さつき神がベルトを掲げてから10分近く経とうとしている。

「え、えっと、神様?そのベルトは一体何なの?」

この状況に耐えられなくなり神にベルトについて尋ねることにした。

尋ねられたのが嬉しかったのかどうか解らないが顔が笑った。

「よく聞いてくれました。このベルトは創造の神が昔造ったオリジナルのベルトです。」

「創造の神が造った?ライダーベルトを?」

「はい、その創造の神が一時期仮面ライダーにはまりまして、その場のノリで造ってしまったそうです。ノリで造ったとはいえ、その秘められた能力は凄いです。」

へー、神でも仮面ライダーにはまることは有るんだな、しかしその場のノリで造るなんて流石神だろ。

でもなんでその神の造ったベルトを持ってきたんだ?

「そのベルトが凄いことはわかったけど、何で俺に見せるんだ?」

「あ、そうでした、貴方が望んだ特典がオリジナルのライダーベルトでしたのでこのベルトを渡そうかと思ひまして。私達もこのベルトをどうするかと悩んできたので丁度良いかと。」

「そ、そうなのか。」

それって、神達はそのベルトをどうするかで悩んでいた時に俺が来たから押し付けちゃえ、的な感じだろ。

(まあ、能力は凄いらしいから貰って損はないと思うけどな。)

「わかった、俺にそのベルトをくれないか。」

「はい、解りました。貴方へと与える特典はオリジナルのライダーベルトに決定的します。」

神がそう言うのとベルトが光始め浮いていき、そのまま俺の中に入っていた。

「ぐ、ぐあああああああああああ!!!」

俺の中にベルトが入ってきた瞬間俺を激しい痛みが、襲う。

激しい頭痛に、身体中の関節が軋み、俺の身体自体が作り替えられてるような感じだ。

「ぐあああああああああああああああー！」

その激しい痛みには俺は遂に気を失った。

「……………てください、起きてください、三日月大河。」

神の声で目が覚め、身体を起き上がらせる。

「つつ!!」

軽く身体を起き上がらせた途端に激痛が走る。

「はあああ、なあ神様よ、この痛みはなんだ。あのベルトが俺の中に入ってきた瞬間に激痛が走ったんだが。」

「その痛みはそのベルトを使いこなす為の初めの代償よ。ベルトの能力を引き出す為のね。」

ベルトを使いこなす為の代償か、上等だぜ。

「それでこのベルトの能力について説明するからそのままでもいいから聞いてね。」

「わかった、話してくれ。」

「先ず性能としてディケイドとディエンドの複合能力+αよ。昭和、平成の主役ライダーに、サブライダー、全怪人に変身及び召喚出来る能力よ。」

「ディケイドとディエンドの複合で、ライダーシリーズに出てきたラ

イダー、怪人に変身及び召喚出来るって中々のチートじゃないのか？  
そしてこれだけ強力なんだ。それ相応の制限があるんだろ？」

「ええ、もちろん制限はあります。一つ目が変身、召喚に使用するカードを集めないといけません。初めに数枚カードは渡しますがそれ以降のカードは自分で集めてください。二つ目が向こうの世界、ハイスクールD×Dの世界にいるライダー適合者を探すことです。三つ目が一度会ったことのある、もしくは闘ったことのあるライダーのみ変身、召喚が出来ない。この三つよ。」

「え、ちよつと待ってくれ、制限ってそれだけなのか？簡単過ぎないか？」

「ええ、まあ簡単そうに見えますけどカード集めることは結構難しいですよ。全世界を回らないのいけませんよ。ハイスクールD×Dの世界以外の様々な世界を、ですよ？」

「様々な世界ってことはクウガや、龍騎なんかの他のライダーの世界についてことか？」

「はい、そうです。」

めっちゃ楽しみな、様々な世界に行けるし、本物のライダーに会えるなんて。

「あれ？制限があるというのに喜んでませんか？」

「そりゃそうだよ！憧れの仮面ライダー達に会えるんだぜ！それはもう、制限じゃない！ご褒美だぜ！」

俺がテンション高めに言うのと若干引き気味に言う。

「そ、そうなんですか、な、ならいいですけど。」

「で、変身方法は？」

「このカードデツキをベルトに装填して変身をします。」

そうやって神は龍騎の世界で出てきたカードデツキに三日月型のマークが彫られた物を出してきた。

「この中に貴方が使用するカードが入っているわ。これの中は異空間に繋がっていて何枚でもカードは入るわ。そして欲しいカードを念じながら引くとそのカードが出てくるわ。」

「へー、これがねー。」

カードデッキを上に掲げて見ながらデッキの重さなどを確かめる。

「今はまだ一枚もカードは入っていない状態です。」

「何故だ？」

「カードを説明しながら挿入した方が良いかと思いましたが。」

あ、そういうことね。

「なら、説明しながらお願いします。」

「はい、まずはクレセント専用のカードから説明しますね。」

ん？聞いたことのない言葉が出てきたな。

「なあ、そのクレセントってなんだ？」

「言ってなかったかしら？クレセントってのは貴方の変身するライダーの名前よ。」

あ、そうなんだ。初めてきいたよ。

「それでカードについてだけど、アタックライドのカード三枚、ファイナルアタックライドのカード一枚、モードチェンジのカードが六枚の計十枚がクレセント専用のカードになるわ。」

説明と共に十枚のカードを俺に渡してくる。

「アタックライドがブラスト、インビジブル、イリュージョンの三枚か。」

この三枚とも、原作でも出てきたからその能力については理解している。

「ファイナルアタックライドが一枚で、このモードチェンジのカードがよく解らないな。」

俺が能力について悩んでいると神が教えてくれた。

「それらのモードチェンジのカードはクレセントの基本形態から様々な力をもつ形態にチェンジするためのカードで、ライダー、ラッシュ、バーサーク、ソード、ガン、アックスの六形態にチェンジ出来るわ。それぞれに長所や短所があるからそれを理解しておくで戦闘に成ったときに臨機応変に対応出来るわ。」

なるほどなるほど、そういうことなんだな。

「さて、クレセント専用のカードについて貴方が理解したところで次の段階の話にうつります。次は貴方にプレゼントするライダーカー



ドについて話しましょう。今回貴方にプレゼントするライダーカードは二枚、二枚だけプレゼントすることになったわ。」

二枚だけ、いや二枚も貰えるのか、よっしゃ!!

「貴方にはこのカードの中から二枚カードを引いてください。その引いたカードを貴方にプレゼントします。」

神が取り出したのは軽く五十枚を越えるカードの束だった。

「(この中から二枚か、色んなライダーがいるから出来るだけ能力が被らないライダーを引きたいな。)」

じつくりとカードを見つめ、考えながらカードを引く。

「一枚目はっと、」

俺が引いた一枚目は仮面ライダー？とは言い切れない物だった。

「これは、確か仮面ライダー龍騎に出てきたオルタナティブか?」

「そうですね、貴方が引いたのは仮面ライダー(?)オルタナティブです。そしてこちらがオルタナティブ専用のカードです。アドベント、ソードベント等のカードです。オルタナティブが使っていたカードと同じ能力をもっています。」

説明を受けながらオルタナティブのライダーカード、アドベントのアタックライドカード、ソードベントのアタックライド、ホイールベントのアタックライドカード、アクセルベントのアタックライドカード、ファイナルアタックライドのカードを貰った。

「さて、二枚目を引いて頂戴。」

「よしっ、これに決めた!」

俺の引いた二枚目のカードは、これまた仮面ライダーとは言い切れない物だった。

「ラ、ライオトルーパーかよ。」

これは、ハズレのカードだな。

仮面ライダーファイズでも直ぐ倒されたし、デイエンドに召喚されるときは三体出てきて兵隊扱いされたやつだか、完全ハズレのカードだ。

「あらあら、ハズレのカードを引いたわね。まあこれがライオトルーパーのカードよ。」

神から受け取ったのはファイナルアタックライドのカードだけ、それ以外は何もなかった。

「(こんなんで俺はハイスクールD×Dの世界を生き残れるのかな?)」

その時俺はこれからのことで真っ暗だった……………

## 転生するようですよ!!? 最終

「さて、全ての特典を与えたからそろそろハイスクールD×Dの世界に送ろうかしら。」

二枚のライダーカード(?)を貰ってから俺が悩んでいると神がその口にする。

「ちよつと待つてよ神様！俺まだクレセントへの変身の仕方を教えてもらつてないし、何より質問したいことが山ほどあるんだよ。」

変身の仕方すら知らないからあっちに行つてからが不安だし、ライダーカードをどのようにつかつてライダー達に変身及び召喚するかも知らないのに、特典すべて与えたからハイスクールD×Dの世界に行けなんて完全に積みゲーだろ。

「あれ？変身の仕方を教えてなかったかしら？それにライダーカードの使い方も?。」

「そうだよ！一切方法を教えてもらつてないぜ。それなのにもう転生させるなんて無理無理あっちに行つてすぐ死んじまうよ。ハイスクールD×Dの世界は死亡フラグが立ちまくりの世界なんだから、できる限りの事を、知れるだけの情報を欲しいんだ。」

「そう、わかつたわ。なら今から変身方法とカードの使い方をあなたに教えるわ。時間も余り無いことだし手短かに説明するわ。」

おお、ありがたぜ。

「まず変身方法は簡単に言えば、クウガ、龍騎、ファイズ、ブレイドの変身方法の合体よ。」

「変身方法の合体だつて？よくわからないんだが、それは一体どんな変身方法なんだ?。」

「初めに貴方の体の中に入っているライダーベルトをクウガの様に出して装着する。次にさつき渡したカードデッキを出して好きなポーズをとる。そのポーズの後にカードデッキを頭上に掲げてファイズのようにベルトに装填させて横に倒す。最後に両手をクロスさせながら前に出し、そこからブレイドの様にベルト左右についているレバーを引いたらそれで変身完了よ。わかつたかしら?。」

「えっと、まずはベルトを出す。」

クウガの様に両手を腰あたりに持つてきてベルトを発現させた。

「お！出来た出来た。ヤベエちよつと感動してきた。」

ただベルトを発現させただけなのにこの感動だから本当に変身できた時は感動のあまりに死んでしまいそうだけ。

「それでさつき貰ったこのカードデッキを持ちながら好きなポーズをとるんだよな。好きなポーズと言われても何をどうしたら良いか全くわからないんだが。何かカッコいいポーズないかなあ〜？」

俺がどのポーズにするか悩んでいると神が意見をだしてくれた。

「これもまたいろいろな仮面ライダーの変身ポーズを参考にしたり合体させれば良いんじゃない？」

「合体、参考かあ。」

参考にするなら同じようにカードデッキを使つて変身していた仮面ライダー龍騎の世界のライダーか、単純に俺の好きな仮面ライダーにするかだな。

それから一時間位かけてポーズをどうするか決めた。

「俺の変身ポーズはこれだ!!!」

手に持っていたカードデッキを裏返しに持ち直し、自分の体の前にもつてゆく。

このポーズの基本の部分は俺の好きな仮面ライダーであるデイケイドだ。デイケイドと初めの部分は同じにしているがこの後を変えている。

自分の前にある状態からクウガの様に素早くベルトの右側に移動させる。

そしてファイズのようにカードデッキを頭上に掲げ、ベルトに装填させ横に倒す。

【STANDING BY】

ファイズの世界の仮面ライダーの様にベルトから機械音が出ると共に、ブレイドのターンアップ前の音楽に似た音も流れ始める。

「それらの音が流れたら変身可能の合図よ。あとはベルト左右にあるレバーを引くだけでいいわ。」

「わかったぜ。」

両手をクロスさせながら前に出し素早く左右のレバーを引く。

【HENSIN】

カブトの世界のライダーと同じ機械音が流れ、俺をメテオに似た感じの黄金に近い黄色の球体が包み込む。

数秒し球体が消滅すると俺の体は電王のプラットフォームに近い外見に変わっていた。

「どうやらうまく変身できたみたいね。今の貴方のその姿が仮面ライダークレセントの初期形態よ。まだ完全に貴方になじんでないのよ今の貴方では負担に耐え切れないと判断されてブランクモードのようね。でも貴方自身がトレーニングなどして鍛えていけばライダーモード、つまり通常形態に変身出来るようになるから頑張つてトレーニングしたらいいわ。あ、それと今の形態じゃライダーカードを使うことはできないから気をつけなさい。」

「わかったぜ、早く通常形態になれるようにきたえてやるぜ。で、カードの使い方はどうしたらいいんだ？」

たぶんだけど左手首についているバイザー（だったよな？）を使うんだらうけど念のために確認をする。

「もう気づいてるでしょうけど貴方の左手首についているバイザー、クレセンバイザーに読み込ませて使うわ。クレセンバイザーはソード、ガン、アックスの三タイプに変形することが可能だけど、まだカードをもっていないからできないわ。カードは貴方が強くなれば勝手に出てくるから安心していいわ。」

「おうーこれで俺の質問は終わりだからハイスクールD×Dの世界に送っても大丈夫だからな。」

「ええ、なら今から貴方をハイスクールD×Dの世界に転送するからそこに展開した魔法陣にのってもらおうわ。」

後ろを見てみるといつの間にか魔法陣が展開されていた。

「これに乗ればいいんだな、わかったぜ。」

そういいながら魔法陣にのる。

すると魔法陣が光り始めてあと、俺の意識は途絶えた。

「さて、貴方がどんな風にハイスクールD×Dの世界を生き抜くか私  
たちはここから見学しましょう。」

神が何か言っているかはわからなかった。

## ハイスクールD×Dの世界に転生しました その1

「うっ、ここはどこだ?」

気を失ってから一体どれぐらいたったかわからないが俺はどこかわからない部屋で目が覚める。

「たしかすべての特典を貰って、その使い方を教えて貰って魔法陣で… ってことはここはもうハイスクールD×Dの世界ってことか!!??」

だったらここがもうハイスクールD×Dの世界ならば今俺のいる場所をしらべないと。物語の中心地域の駒王町からの辺だとかいろいろ知らなければ。

早速調べるために立ち上がろうとするとスマホに着信がはいる。

「え?なんでスマホが?俺はまだガラケーだったからスマホなんて持つてるわけないし何よりもこっちの世界では契約すらしてないから今ここにスマホがあるのはおかしいぞ。」

ここにスマホがあることに不安を持ちながらも恐る恐る電話に出る。

「はい、もしもし。」

『ようやくつながったわ。随分と寝ていたわね三日月大河君。』

ん?何やら聞き覚えのある声だな。

「えっと、もしかして神様なのか?」

『そうよ、気付かなかったの?』

「いや、なんでかな〜って。俺ガラケーしか持ってないしこっちの世界では契約してないのになって。」

『ああ、そういうことですか。今あなたが持っているスマートフォンは私が準備したものです。』

びつくりしたく、誰かの落とし物かと一瞬思ったぜ。

「スマホについてはわかったが、電話してきた理由はなんだ。」

『それは貴方の居る場所の説明と貴方のこの世界での立ち位置についての説明をし忘れてたからよ。』

「なるほどな。ってか神様でも忘れることもあるんだな。正直意外だ

ぜ。」

『それは神だって忘れることぐらいあるわよ。全能神ではないんだから。まあ全能神でも最近では忘れてるけどね。』

全能神結構年寄りになっっているんだな（遠い目）

『とにかく説明するわ。』

「おう」

『今貴方の居るその場所ハイスクールD×Dの世界でこれから貴方が生活していく家よ。基本的なつくりはそこら辺にある家となんも変わりはないけど少し違うところが地下にトレーニングルームがあることよ。』

「トレーニングルーム？なんだそれ。」

『その名の通りトレーニングするところだけど、今まで戦ったことのある怪人やライダーと再び戦えるシステムがあるわ。それと各仮面ライダーに出てきた戦闘員や雑魚キャラはもともと戦えるからトレーニングルームで戦闘経験を養ってもらって構わないわ。』

お、戦闘経験が養えるのはありがたいな。変身したはいいけどまともに戦えずに死にました、何てことになったら最悪だからな。これから時間が空いたらトレーニングルームにこもって戦闘経験を養うとするか。

「ありがと、神様。」

『別にいいわよ、私が転生させたのだからそう簡単に死なれたら困るだけだから。』

「それでもありがたいで。神様がトレーニングルームを作ってくれたお陰で何とかこの死亡フラグだらけの世界を生き抜ける確率があったからな。」

『そう。それより次の話に行くわ。』

「はいはい、神様。確か俺のこの世界での立ち位置だったよな？」

『ええそうよ。この世界でのあなたの立ち位置は駒王学園の用務員よ。』

「………？用務員？俺が駒王学園の？」

俺まだ二十二歳だぜ？それなのに学園の用務員だなんて。



『詳しい設定としては、駒王学園の卒業生である貴方は大学に卒業後に駒王学園の用務員の試験に合格しこの春から駒王学園の用務員として働き始める、よ。』

「いやいや、ストップストップ。待って待ってなんでよりによって用務員なの。別に教師とか講師でもよかったよね？なんで用務員なの？」

『簡単に言えば貴方が教師や講師をできるほどの頭脳を持っていないからよ。それとちようど今まで駒王学園の用務員をしていた人が歳でやめることになったからよ。そこで貴方を駒王学園の用務員にしたのよ。できる限り物語の中心的場所である駒王学園にいたら何かと行動しやすいでしょ。』

確かにそうだけどき、何ていうか用務員の人達って大体四十路を超えているイメージしか俺の中にないからなんか抵抗があるんだよな。

『まあ、我慢しなさい。マンモス高の用務員よ、たくさんのやらなければいけない仕事があるし、基本的に女子生徒が多いのだから力仕事もしないといけないから休んでる暇なんてないわよ。それにうまくいけば女子生徒たちと仲良くなれるかもよ？』

神の最後の言葉を聞いて俺の中のやる気スイッチがオンになり心のエンジンに火がともった。

「よしわかったぜ！俺は駒王学園の用務員になるぜ！」

我ながら軽し不純な動機であることは理解しているが前の世界では異性との交流が少なかった俺にとっては断りがたく、ありがたい良いメリットだからな。

『はあ、受ける理由が最低のレベルよ。まったく。』

呆れたように神は言うがしようがないんだよ。

「しようがないだろ！俺だって男なんだから。男だったら一度は夢見る展開なんだから。」

『もう、いいわ。これで伝えるべきことはすべて伝えたからもう切るけど何か聞きたいことはあるかしら？』

聞きたいことか・・・あつ！聞きたいことがあったぞ。

「一つだけ聞きたいことがあった。今のこの世界の時間軸は原作でい

うどの辺りなんだ?」

今の時間軸次第では重点的にやらなければならないことが変わってくるからな。

『そうね、今の時間軸は原作開始のおおよそ一年前ぐらいね。だから貴方がクレセントの力になれる時間が十分にあるわ。』

一年前か、確かにクレセントの力になれる時間はあるからゆっくりとまではいかないけどそこそこのペースでいけるな。

『あーごめんなさい、超重要なことを伝えるの忘れていたわ。』

「超重要なこと?しかもまだ忘れてたんだ。」

『ええ、それぞれの仮面ライダーの世界への渡り方を教えていなかったわ。危うくオルタナティブとライオトルーパーの二枚だけになるところだったわ。』

「おいおいおいおいおい、おいつ!!!!!それ一番忘れてはいけなやつじゃないか!!!」

それぞれの仮面ライダーの世界への渡り方をわからないと俺の戦力アップが出来ないところだったぞ。危なかったぜ。

『説明するわね、仮面ライダーの世界への渡り方はクレセントに変身してトレーニングルーム傍にある黒い扉をくぐればランダムに仮面ライダーの世界へいけるわ。一度行った仮面ライダーの世界でライダーカードを手に入れるまでほかの世界へは行けないから注意して。』

「その世界に複数のライダーがいる場合はどうしたら良いんだ。例えば龍騎の世界なんてライダーの数が多いじゃないか。」

『その場合は一枚でもライダーカードを手に入れたら次の世界に行けるわ。他のライダーカードが欲しくなれば何度でもその世界に行くことができるから大丈夫よ。』

「ならこつちの世界へ戻ってくる場合はどうすればいい。」

『その仮面ライダーの世界へこの家も一緒に渡るから行くときと同じことすればいいわ。』

なるほど、光写真館と同じもんか。

「わかった、大体理解した。」

『そう、なら切るわね。せいぜい死なないことね。』

「おう！そう簡単に死ねるかよ。」

ツーツーツー

神との通話が終わった。

「うわっ！なげえな。約二時間近く話してたし。通話料大丈夫かな。」

少しずれたことを考えながらもこれから始まるハイスクールD×

Dの世界に胸をおどらせていた。

## ハイスクールD×Dの世界に転生しました その2

神との二時間近くの通話を終えてから俺はこれから住むことになるらしい家の間取りや、部屋数などを調べたり今の俺にできうることを行っている。今は主となるリビングやキッチン寝室などを調べ終えたところだ。

「さてと、あと残ってるのはトレーニングルームだけだな。ちよつとワクワクしているぜ。」

地下へと降りる階段に向かう。カードデッキも忘れることなく持っていく。調べるのが早く終わることができればそのままの流れで戦闘員や雑魚キャラと戦ってみるつもりだ。

「えつと、ここだなトレーニングルームは。」

階段を下りて右側にトレーニングルームがあり、左側には表札に何も書かれていない扉があった。

「神様はこのとびらのことおしえてくれなかつたぞ。」

一体何のための部屋なのかと不審に思い扉の取っ手に手をかけ引いたり押ししたり横にスライドさせたりするが扉は一向に開かなかった。

「おかしいな。なんであかないんだ。」

ん？ちよつと待てよ、この扉の色は黒色だな。それとトレーニングルームの傍にあるからこれが他の仮面ライダーの世界へ渡るための扉ってことか！

「やべえ、すつかり忘れてたぜ。確かクレセントに変身してからじゃないといけないんだったな。」

俺も神様にあまり言えないな、俺なんてついさっき言われたことを忘れてるんだから。

「さて気を入れ替えてトレーニングをするか！」

「なるほどなるほど。こういう原理で怪人やライダーを召喚して模擬戦が出来るわけか。」

トレーニングルームに入ってまず俺がしたことはどういう原理で成り立っているのかの確認をした。俺は新しい機械などを買ったときは必ずと言っていいほど説明書を完全に読み込む。その正確なためかトレーニングルームについての説明書みたいなものを読み込み理解した。

「しかし読み込むのにだいぶ時間かかったな。三時間近くかかったぜ。ところどころにわけわかんない単語とか出てきて調べることに時間を要したな。」

そこでまた驚いたことがあった。神様がくれたスマホがありとあらゆる事柄が書かれていた。人間界の歴史のみならず、悪魔、堕天使、天使の三姉みの組織の歴史。アースガルスやヴァルハラなどありとあらゆる組織についてまとめられていた。またはぐれ悪魔の手配者リストが連絡場所とともに載せられており随時更新されるようだ。

「戦闘経験を積んだ後にはぐれ悪魔と戦うのも一つかな。だけど黒歌

みたいに特殊な事情ではぐれ悪魔になってしまった奴らもいるだろしきをつけなとな。ま、先の事を考えるのは止めにしてまずは目先のトレーニングをしっかりとこなすでしょう。」

やはり初めに戦うとしたら戦闘経験もないことを含め戦闘員がいかな？

そう考えた俺はコントロール室に入り、戦う相手と強さ、数を設定した。

☒対戦相手をショットカー戦闘員、戦闘力を一に設定、数を一に設定しました。二分後に転送を始めます。☒

俺が設定を入力するとアナウンスが入る。

ちなみに戦闘力一は常人より強く武道などのトップクラスの人より弱い位と説明書のようなものに書かれていた。またその他は次のように書かれていた。

戦闘力一・・・常人以上武道トップクラス未満

戦闘力二・・・武道トップクラス数人がかりで倒せる

戦闘力三・・・平均的な怪人クラス

戦闘力四・・・幹部クラスの怪人

戦闘力五・・・首領やトップの怪人と、一部の幹部クラスの怪人（実質大幹部）

今の俺の戦闘力は一を少し下回る位と診断された。

診断では今のままでは下級の堕天使や悪魔に負けると出ていた。これから堕天使や悪魔と戦うことになるからこの診断をしっかりと受け止めてトレーニングすることにした。

だがあくまでもこの診断は俺個人の戦闘力であってクレセントに変身した場合は戦闘力二を少し上回るらしい。

「この世界は本当の意味で《戦わなくては生き残れない》だからな。」出来るだけ鍛えて死なないようにしなとな。

そう心に決めトレーニングにむかう。

原作開始まであと・・・一年

## 特訓&勤務

神に転生させて貰ってからおおよそ半日が過ぎた。

トレーニングスペースでの戦闘訓練は散々なものになってしまった。

勝ったか負けたかで言えば勝つことは出来た。

生身の戦闘は時間がかかったが勝てた。(身体へのダメージははかりしれないものへとなってしまったが)

それだけなら良かったのだが次にクレセントに変身して戦闘した時が悲惨なことになってしまったのだ。

やはり神が創造したライダーシステムであるため、その性能は凄いものだった為簡単に戦闘員に遅れをとることはなかった。

数回の打撃などで何人も戦闘員を倒した。

本来なそこで止めておけば良かったのだが俺は好奇心旺盛の為についてファイナルアタックライドをやってみたくなってしまうた。

いまだクレセントの全能力を把握していないのに本来やるべきではなかった。

その時はわくわくして早くやりたかったのだが、今となっては酷く後悔している。

ファイナルアタックライドの威力はすさまじく戦闘力二の怪人をワンパンすることが出来たのだが周りが更地になってしまった。

仮想の建物やオブジェ等の俺の半径10m範囲内が更地になった。

「早めにクレセントの力を全て理解してコントロール出来るようにならないといけないな」

そう俺は心に決め、これからのトレーニングをすることを誓った。

(早いこと、クレセントのモードを解放して戦闘手段を増やさないとこれからの死亡フラグの多過ぎるハイスクールD×Dの世界を生き残くことは容易ではないだろうな。)

ピピッ！ピピッ！カチッ

目ざまし時計の音に起こされ俺は目を覚ます。

今日は俺が初めて駒王学園に赴任する日だ。

学園の用務員として駒王学園に赴任するのだが正直に言っただけ不安しかない。

用務員の任事内容もどんなものか知らないし、どんな風にして学園の生徒と接したら良いか分からない。俺は大学を出たばかり（という設定）で、そこまで学園の生徒と年齢も離れていないから余計にそう思う。

あと2時間もしたら出勤時間に成るのだがいまだに覚悟が出来ていない。

すぐに慣れればいいのだがいかせん俺は不器用だからそれは望めないと思う。

それに、リアス・グレモリーや姫島朱乃、支取蒼那など原作主要キャラとも遭遇することになるだろうがどのように対応したらいいかも分からない。

下手なことをして仮面ライダーダーククレセントについてをバレて眷属悪魔にされたらたまったもんじゃないからな。

眷属悪魔化は最終手段でしかない。

戦闘の中で瀕死の状態になってしまった時に生き返る為に眷属悪



魔になるだろう。

それ以外で俺が悪魔に転生することは絶対にありえないといってもいい。

「はあ、なんやかんや考えていたらもう出勤しなければならぬ時間になってしまった。」

あまりテンションが下がらないが駒王学園への通勤の道を歩き始める。

「……か、駒王学園は……」

家を出てから数分の距離に駒王学園があるので、すぐについた。

まず俺は教員室に向かい他の教員の方々に挨拶をすることにした。

「つて、俺教員室の場所知らないじゃん。」

俺が困っていると、背後から声がかけられる。

「あのっく何かお困でしようか」

「ああ、実は……」

教員室への行き方を教えて貰おうと声のかけられた方向へ、振り向くとそこに一人の女子生徒が立っていた。

その生徒にこの学園の用務員として赴任すること、他の教員の方々に挨拶をしたいが教員室の場所がわからないことを伝えた。

すると女子生徒は、「なら、私が案内しますよ。私も教員室に行かないといけないので。」

「すまないがお願いしても良いかな？」

「はい！まかせてください。」

俺はこの女生徒の好意に甘えることにして、先に行く女生徒の後をついていき教員室へと歩き始める。

「そういえば貴方の名前って何というんですか？」

少し歩いたら女生徒が訪ねてきた。

「ああ、自己紹介がまだだったな。俺の名前は三日月大河だ。最近大学を出たばかりの二十二だ。これからこの学園の用務員になる。よろしく頼む。」

「えっ！二十二歳ですか？若いなあ〜と思っていましたけど、まだ大学を出たばかりの新しい人なんですね。」

「なら、君の名前を教えてください。」

「えっと私の名前は緒中葵です。学年は二学年で陸上部に所属しています。」

それからたあいもない話をしていると目的地である教員室の前まで来ていた。

「つきました！ここが教員室です。私は先生に用事がありますのでこの辺で。」

「ありがとう緒中。おかげで助かったよ。」

「いえいえ、大丈夫ですよ。」

そういいながら緒中は教員室の中へと入っていった。

「俺も中に入って他の教員の方々に挨拶しないとイケないな。」

ガラガラッ

「先礼します。今日からこの学園の用務員として赴任することになりました三日月大河です。よろしくお願いします。」

「ああ、君か新しく赴任するという用務員の三日月君か。まっていたよ。」

俺が挨拶すると奥からメガネをかけた初老の人がきた。

「はい！今日からよろしくお願いします。」  
此処から俺の駒王学園の用務員としての学園生活が始まるので  
あった。

## 特訓&勤務 その2

教員室にいた他の先生たちへの挨拶回りを終えて今は入学式が行われている。順調に式は進んでいる。今行っている新入生代表の誓いの言葉が終われば次は赴任式に移りそこで俺は全校生徒に挨拶をする予定になっている。こういった風に全校生徒の前等といった人前で話した経験が皆無なので平然を装っているが内心めっちゃ緊張している。

「えー、これで入学式は閉じますがこれより赴任式を行いますのでもうしばらくそのままでお待ちください。」

教頭の言葉に一部の生徒たちが騒ぎ始める。

「きゃああああ!!!かっこいいせんせいくるかな?」「きつとイケメンよ!!」「美人でおっぱいのデカイ女教師よ来てくれえええええええええ!!!」

(たぶんだけど、最後のは兵藤か、松田、元浜の内の誰かだろうな。それとごめんね、俺はイケメンじゃないし他の赴任してきた教員の方々も言うほどイケメンじゃないんだよ。)

「それでは今日よりこの学園で働いていただく教員の方々に登場してもらいます。」

教頭の合図と学園長の先導で壇上に上がる。教員の方々が壇上に上がり終わるとそれまで騒がしかったのがウソのように静かになった。

やはり女子生徒の期待に応えられるほどのイケメンはいなかったようだ。

「えー、簡単にですが自己紹介をしてもらいます。」

自己紹介か・・・笑いを取りに行くか真面目に言うかどうしよう。高校時代は笑いを取りにいったら数人しか笑ってくれなくて数日間クラスで浮いていた苦い経験があるからな、真面目にいくか。

あーだこーだ何を話すか決めているとあつという間に俺の番に回ってきた。

「えー、俺の名前は三日月大河と言う。今日からこの学園の用務員と

して赴任してきた。この学園が初めての勤務先のためいろいろ迷惑をかけると思うがこれからよろしく頼む。」

そう言い頭を下げると、

「よろしくー！ー！」「ねえねえ結構かつこよくない？」「この学園が初めてってことは年齢もわかいのかな？」「イケメンは帰れ!!!」「」

等いろいろな反応が返ってきた。ってか俺ってイケメンだ!入るのか?そして兵藤、松田、元浜の三人の声ははつきりと聞こえてきた。

あの三人は何がしたいんだ。俺はフツメンなのに。

それ以降特に問題はなく赴任式も終わった。

「よしっと、荷物整理はこれで良いだろう。」

赴任式が終わってから用務員室に案内され自分の机と、修理や製作に使用する工具の整理と手入れをしていた。これから俺が使うものだから何度も何度も念入りに手入れた。その整理と手入れが終わりに休憩をしようとコーヒーをいれ椅子に腰掛けようとしたら用務員室の扉が叩かれる。

「なんだ?カギは空いてるから勝手に入ってきてくれ。」

「し、失礼しましゅ！」

扉を開けると同時に盛大に噛んだ女子生徒。

「おいおい、大丈夫か？」

「は、はひー！」

またしても噛む女子生徒。このままでは埒があかないので用件を聞く。

「まあいい、それで何の用でここに来たんだ。それとお前の学年と名前を教えろ。」

「えっと、私は二年の佐々木です。教室の蛍光灯の交換と立て付けが悪くなって開閉がしづらくなった扉の修理をお願いしに来ました。」

蛍光灯の交換と扉の修理か、新年度開始早々この二つって前の用務員は前年度終了後にちやんと整備していたのか？あ、そういえば結構な年を取ったから俺が来たんだったな。たぶんだが力仕事や高いところでの仕事が出来なかったんだろうな。

「わかった、少し時間をくれ。替えの蛍光灯と修理に使う工具を準備する。」

あまり時間をかけずに替えの蛍光灯と工具を準備し女子生徒に案内してもらおう。

「.....」  
「ジーーーーー」  
「ぎやあああああ」

蛍光灯を交換しおわり扉の修理をしていると俺の周りに沢山の生

徒が集まってきたため作業に集中できないでいた。修理自体は簡単にできるようなことだったがいかせん周りの生徒がいるせいで視線が気になり普段より時間がかかっている。

「よしと、これで終わりだ。」

何とか最後のねじを締め終わり修理を終わる。早くこの空間から抜け出した俺は作業が終わるなり工具を工具箱に収納し教室を出ようとするが周りにいた生徒たちが帰らしてくれなかった。

「三日月さん！三日月さんの年齢を教えてください！」

「年齢か、二十二だ。」

「ええ!! ってことは私たちとあまり年齢は離れていないわ!!」

離れてはいないがそれがどうってことではないだろ。つとなぜかハイテンションに物事を言っている女子生徒に内心突っ込む。そしてどうにかしてでもこの空間から抜け出したい俺はそれとらしい理由をつけて抜け出すことにした。

「質問ならあとで聞くからよ、そこをどいてくれ。まだまだやらないきやいけない仕事が残っているんだ。」

「あ、ご、ごめんなさい。」

女子生徒たちが道を開けてくれたのを確認してから教室からでる。フオローも忘れずに。

少し重い足取りで用務員室へ戻る。

## 学園いる悪魔との邂逅

俺が駒王学園に勤務し始めてざっと一週間近くたった。初めは駒王学園の広さに戸惑い仕事をうまくこなすことが出来なかったが一週間近くも勤務していたため駒王学園の間取りなども頭に入っている。そこそこ本性を隠して勤務しているため他の教員や生徒達からの評判も良い方だ。また勤務しながら原作との違いがないかも調査していたが違いらしい違いは見つからなかった。

「まったくいつ原作が始まるんだか。用務員として働くだけじゃ刺激がなくて退屈なんだよな。」

用務員業の傍らにはぐれ悪魔などの討伐もしているせい最近刺激を求めるようになってしまったようだ……… けつして戦闘狂ではないはずだ。

「しかし早くクレセントの次のモードに行きたいな。ずっとブランクモードなんて嫌だし、ほかのライダーの世界に行ったときに力不足でやられるかもしれんからな。」

今の俺の能力値としては戦闘力二に上がっている。トレーニングを重ね基礎体力や戦闘技術を磨いていたら戦闘力二に上がっていた。だが一般的な怪人クラスには負けてしまう。幸いなことに今まで戦ってきたのが最下級はぐれ悪魔や戦闘員だけだったからそこまで苦労しなくてよかったがこれからもそうだとはいえないからな。

「原作が始まるまでには少なくともライダーモードには成っておきたい一つでもいいからライダーカードを手に入れたい。」

原作が始まればどんどん相手が強くなるから俺自身も強くなるならなと死んでしまう。この世界の命の重さはとても軽い。そんな世界で信じれるものは自分自身の力だけだからな。

コンコン

ふと用務員室の扉が叩かれる。

「あー、入ってきていいぞ。」

「失礼します、第二学年の支取蒼那です。」

おいおい、なんで支取が来るんだよ。この学園にいる悪魔の一人で



☒トリ―家の次期当主で駒王学園生徒会長がよ！

俺は内心戸惑いながらも戸惑いがばれないように対応する。

「どうしたんだ？なんかが破損したか？」

「少々貴方にお話がありまして今回こちらに来ました。」

「俺に話だど？」

生徒会長で悪魔の☒トリ―が、何か破損したなら悪魔の力で修繕したらいいし特別生徒会と用務員がつながりがあるわけでもないし、一体どんな話なんだ。

「ええ、ですが生徒会長としてはありませんしましてや駒王学園の生徒としてでもありません。」

なんだか嫌な感じがしてきた。

「ん？何が言いたいんだ、下らん事を言いに来たなら帰ってくれ。仕事の邪魔だ。」

「悪魔としてです。この学園及びこの駒王町を共同管理する悪魔としてあなたに会いに来ました。」

その言葉と共に支取、いやソーナ・シトリー―は背中から悪魔の翼を展開し人除けの結界のようなものを張った。

「（おいおい、自分から正体をばらすなんて考えてなかったぞ）」

ソーナ・シトリーの行動に驚きながらもなんとか落ち着こうとする。

「おいおい、悪魔だど？そんなものこの世の中に存在するわけないだろ。生徒会長で成績優秀の支取が頭の痛い奴なんて予想すらしてなかったぞ。全く手の込んだ嘘をしゃがる。背中に動く翼の玩具まで準備しているとはな。」

あくまでも信じてない、そうアピールしてこの場を切り抜けようと試みるがソーナ・シトリーも予想していたのか次の手をうってくる。

「ここ数日に起きたはぐれ悪魔の討伐者、それは貴方ですよ？私の眷属が確認しています。」

チツ、見られていたか。だが今この場で俺の正体がばれるのは避けたい。まだブランクモードでしかない俺はシトリー―眷属全員と戦闘しても数人倒せてやられるだろう。ほかのライダーに変身できるよ

うになっていたらまだ勝率は上がるかもしれないが今のままでは100%無理だ。

「(せめてライダーモードになれるようになるまで話を伸ばしておきたい。対等に話せる力をつけない限りあちらに優位に事が進んでしまう可能性がある。)」

ソーナ・シトリーに限ってそんなことはないだろうが万が一があるからな。用心するに越したことはない。

「はぐれ悪魔？なんだそれは。」

「とぼけないでいただ「そんな下らないことを話しに来ただけならすまないが帰ってくれ。俺はまだまだ仕事が残っているんだ。これから買い出しにもいかなければならないしやることが多いんだ。」そうですか。わかりました、また日を改めて伺います。失礼しました。」

ソーナ・シトリーの言葉を遮り言葉を紡ぐとソーナ・シトリーも諦めたようで一礼した後には用務員室から出て行った。

しばらくして周りに誰の気配もしなくなったの確認して大きく息を吐く。

「はー、俺がはぐれ悪魔を討伐していつてるの見られていたか。これからはすこし控えて、ライダーモードになるための訓練をするとするか。」

今後の事を考えつつ買い出しの準備を始める。

これが俺とこの学園にいる悪魔との初めての邂逅だった。

## 原作への道

ソーナ・シトリーとの邂逅からしばらくが経ち、再び向こうからの接触がなくひとまず安心していた矢先に駒王町に四体の墮天使の気配が始めた。

まだ何も行動を起こしてはおらずソーナ・シトリーともう一人の悪魔も動いていない。まだ二人は墮天使の目的を知らないから動いていないが、転生してきている俺はこの後何が起こるかを知っているからこれからどんな風に動くか二つの考えで悩んでいる。

考え1・・・これから墮天使、レイナーレが接触するであろう兵藤一誠を監視して殺されるギリギリで助けてあとあと来るもう一人の悪魔に後を任せる

考え2・・・しばらくは様子見をして原作通りに事を進め、俺がアイツ等と関わるタイミングをズラす。

考え2は兵藤一誠を一度見殺しにしなければならぬ為俺のメンタル面がもつかどうかという問題もあるが一番先がわかる選択肢ではある。

「今の俺の実力でレイナーレ達を倒すことは可能になったが…」

二日前ほどにクレセントのライダーモードに変身出来るようになり、オルタナティブとライオトルーパーの変身、召喚が可能になった。調べてみたらライオトルーパーの1体分が下級悪魔、墮天使並であった。(神から貰ったスマホ調べ)レイナーレは厳しいと思うがレイナーレの部下であるドーナシークとカラワーナ、ミッテルトにライオトルーパーをあてれば半々の確率で勝てるだろうしもしライオトルーパーが負けたとしても俺が倒すなりしたらいい。

「今回についてはなんも心配はしていないだよな。万が一があっても負けることはないだろうし。」

これは油断ではない。トレーニングを積んだ上の自信だ。

「とりあえずは傍観者にまわっておくか。タイミングをミスったら即死ぬのがこの世界だからな。」

正直言つて死にたくない。けれどこれからの流れを知っているも

のとして助けたいという気持ちがあるのもまた事実。

「基本的には傍観者だがその場その場で臨機応変に動いた方がよさそうだ。」

仮面ライダーオーズの火野さんも『手が届くのに、手を伸ばさなかつたら、死ぬほど後悔する。それが嫌だから手を伸ばすんだ』って言ってるからな。そういうった仮面ライダーの方々と同じライダーだからな。助けれる命は助けるとするか。

「よしっ！傍観者になるのをやめるか。俺は仮面ライダーだから真正面から戦うとするか！」

ついさつきまで傍観者に回ろうとしていた自分が情けなく思う。俺があこがれたのは愚直にただ前の命を助け、ただ目の前の怪人を倒すそんなカッコいいライダーだった。今俺は仮にもそのカッコいいライダーの末端にいるんだからライダーの名に傷をつけるわけにはいけないからな。

## 始まり

俺がここ、ハイスクールD×Dの世界に転生して早いことでもう一年が経過した。

一年、それは原作が始まる時期だ。

兵藤一誠に偽の彼女、堕天使レイナーレが接触してからが俗に言われる原作の開始だ。

一年という長い月日は俺を大きく成長させてくれた。

用務員としても、ライダーとしても…。

まず、用務員としては生徒やほかの教師からの信用を得ることが出来、時々他の学校や学園にも呼ばれるようになった。

用務員としての技量も上がり、多少なりと給料も上がった。

そして、肝心のライダークレセントについてだが二つほど成長できた。

まず一つ目は、ノーマルモードに成ることが出来たということだ。

その前までにつかえていたのはブランクモードとライダーモードだった。

雑魚の相手にはブランクモードで、ブランクモードで手こずる相手にはライダーモードと使い分けていたが俺の体ではライダーモードの多用は出来ず厳しい状況だった。

しかし、ノーマルモードはライダーモードよりスペックは落ちるが今の俺に丁度よく、何度変身しても体への負担は限りなくゼロに近い。

その為、最近ではノーマルモードしか使っていない。

二つ目は、各仮面ライダーで出てきたアイテムを手に入れたことだ。

セルメダルを十、何もマークのないガイアメモリ、未契約のカードデッキの三種類十二アイテムだ。

正直、これらの使い方がわからない。

マークのないガイアメモリがあることなんて知らなかったし、未契約のカードデッキがあることは知っていたがこのハイスクールD×

Dの世界ミラーモンスターが存在しない。

セルメダルに関してアレ次第だな。

「しかし、ライダーカードが手に入らなかったのは痛いな…。」  
そう、一年間の間仮面ライダーの世界へ行ってみたがまだ一つ目の世界で止まっている。

全然ライダーがいる様子もないし、怪人がいる訳でもなく、誰の世界なのかすら判明していない状況だ。

それこそ墮天使や悪魔の気配もない。

俺が前にいた世界だと言っても信じれるぐらいだ。

「さて、そろそろ出勤しますかね…。」

軽く出勤の支度をして自宅から出て、駒王学園に向かう。

「三日月さん、おはようございます！」

「おーす、三日月の兄貴。」

駒王学園に向かう途中にいろんな生徒から挨拶される。

一部の奴からは兄貴と呼ばれ、なんか変な感じだ。

まあ、三か月前にあったあることが原因なんだがな。

それはまた別の機会にしよう。

そうこうしている内に用務員室につく。

「さてさて、今日も一日頑張りますか…。アレも含めて。」

いま俺は用務員の仕事の傍ら、あるモノを作っている。

その段階で、神から貰ったスマホが大いに役立ってくれている。

神からもらったスマホは凄いい、この世界のありとあらゆる情報に加えて全仮面ライダーの性能や能力が詳しく書かれている。

更にあらゆるアイテム類などの情報も入っている。

「このスマホが無ければアレを作ることが出来なかっただろうな。」

このスマホがあれば大抵のことは出来るみたいだ。

そんな事を考えていると俺のスマホに着信が入る。

「あ？誰だ？」

スマホの画面を見ると「神」となっていた。  
ピッ

「もしもし、神か？なんだ？」

『久しぶりね、三日月大河。今日はちよつと伝えておかないといけない事が出来たから電話かけているわ。』

「伝えておかなければならないこと？」

『ええ、貴方を転生させた影響か貴方の居るハイスクールD×Dの世界にいろいろな仮面ライダーが出てきた怪人たちが迷い込んでしまったのよ。』

神の言葉に俺は言葉を失う。

『それも厄介なことに悪神が絡んでいるのよ。』

「悪神が…？」

『ええ、貴方を転生させたときに出来た少しの空間の歪みを利用して、占領されたの。』

「俺が、転生してしまったせいとか…。この世界にいる罪のない人達が殺される可能性があるってのか…。」

『貴方の責任ではないわ。少しの歪みだったから処理を後回しにしてしまった私達神の責任よ。』

どちらにせよ、関係のないこの世界の人々が被害を受けるのか…。「伝えたいことはそれだけか？こうなった以上俺がやるしかないんだ。早く対策を考えねえと…。」

『最後に一つ、この世界に送られる怪人達は仮面ライダーの攻撃しか効かないように悪神が手を加えているからそっちの世界では貴方しか倒すことができないわ。』

「わかった、俺がこの世界を守るさ。末端とは言え俺も仮面ライダーだからよ。」

『ええ、わかったわ。頼むわよ…。』

「おう、じゃ切るぞ。」

『健闘を祈るわ…。』

ピッ

神との通話を切り俺は用務員室に大の字に広がり考え込む。

「いま俺がやるべきことが多すぎる。」

原作の相手に、怪人達の殲滅、用務員としての仕事、誰のライダーか分からない世界…。

ちよつと前まで何処にでもいる一般人だった俺には荷が重すぎものだ。

だか、やらなければならない。

この世界を守るため、この世界の人々を守るために。

自分のみを削ってでも、やり遂げてみせる。

末端とはいえ、ライダーなのだから…。



## 加速

「遂に接触しやがったか…。レイナーレ。」

神からこの世界に怪人達が現れることを聞いた二日後、俺はいつも通り用務員としての仕事をしていると学園の外に墮天使の気配がした。

時期から考えても八割方の確率で墮天使の正体はレイナーレで間違えないだろう。

近くに人間の気配がするのが兵藤一誠だろう。

この二人が会ったということはここから一気に物語が加速するだろう。

「だが俺は基本的に物語に介入しないでおう。大体コカビエル戦までは。」

原作での一卷と二巻に当たる部分は兵藤一誠達にとつての一番重要な場面に当たるから、俺が下手に介入したら物語が大きく変わる可能性がある。

最低でも兵藤一誠とアーシア・アルジェントの二人には一度死んで悪魔に転生してもらわなければこの先の展開が読めなくなる。

物語のキーキャラクターである二人の存在が変ってしまえば、もとも俺のせいですこし狂っているこの世界がどうなるかが分からない。

見捨てる、と言われたら聞こえが悪いが俺は必要だと思っている。だが介入しないといたが、原作と異なる事が起きたら俺は介入するつもりだ。

例えば、この世界に転送されてくる怪人達が現れてしまえば俺以外対処の使用が無いから俺が動くことになる。

怪人のせいで原作キャラを殺されてしまえばこの世界のバランスが崩壊してしまうからな。

「つたく、一体この先はどうなるんだか…。」

俺は胸ポケットからタバコとライターを取りだし、火を付けた後に口にくわえる。

「ふうー、タバコなんて吸うつもりなんてなかったのに今では手放せなくなってきたやがった。」

一か月前ぐらいからなぜかタバコを吸うようになってきてしまった。

理由は分からないがタバコを吸っていると頭が妙に冴え、体の調子も上がる。

「酒を飲まなきゃやってられない位にもなっちゃったしよ。」

日々用務員としての仕事や怪人との戦闘で精神的にも肉体的にも疲労が溜まっていく中、酒を飲んだら今までの疲労が幾分ましになる。

「そのうちハゲるんじゃないか？俺。」

そんな下らないことを言っていると扉が叩かれる。

「空いてるから勝手に入っていいぞ。」

相手が年上の教師だったら失礼な物言いだ、俺に用がある教師はいない。

なんかあつたら生徒を使いに出させるため、教師がここに来たことは一度もない。

「大変です！先生！グラウンドに訳の分からない化け物みたいなのがないか？！」

「何っ?!」

俺は報告に来た生徒の発言に驚愕する。

怪人の気配が今まで一度たりともしていなかったからだ。

「そいつは一体どんな奴だ!?!」

「えっと、なんていうか猫が狂暴になったような顔をしていて、二足歩行だったり四足歩行だったりとする化け物で、警察の銃弾も聞いている様子ではないみたいです。あ、あと体に星座を模ったようなものがあります。いや、そんなことより早く避難しないと危険ですよ!」

「分かった、お前は先に行ってる。すぐに追いつく。」

「は、はい！出来るだけ早く避難してくださいね!」

そういうと走りながらどこかに避難していく生徒。

「(いきなり現れたのか？一才気配を感じられなかったぞ。まだ俺の

気配を感じる力は未熟というわけか。」

自分の能力の未熟さを嘆きながら、クレセントドライバーを装着し仮面ライダークレセントに変身して怪人の目撃された場所に急ぐ。

## リンクス・ゾディアーツとの戦闘

生徒から学園内に怪人が現れたと聞き急いでクレセントに変身し現場に向かっている俺は頭の中で引つかかっていることがあった。

日頃から鍛えている俺は自分でも実感できるほど気配には敏感にはなった。

それがここから遠い所の怪人の気配なら察知できなくはないが、同じ敷地内に現れた怪人を気付かないはずがない。

別に自惚れているわけではないが、それぐらいは出来るという経験による裏付けだ。

取りあえず、目撃された場所に着くとそこには普通の生徒たちは一人もおらず、居るのはリアス・グレモリーとソーナ・シトリーを始めとしたこの学園の悪魔と、リンクス・ゾディアーツだった。

「あの生徒が言っていた怪人ってのはリンクス・ゾディアーツだったか。確かに猫を模した怪人で二足歩行だったり四足歩行になったりするな。」

ここに来て気付いたが悪魔とリンクス・ゾディアーツの周りにはうつすらと人払いと気配を遮断する結界が張られていた。

「(結界が張れているせいで俺が気付かなかったのか。まあ、いい。俺は俺のやるべきことをやるだけだ。)」

結界を壊さないように中に入る。

「なっ!?!?」

「誰なのですか!?!」

俺が結界の中に入るとリアス・グレモリーとソーナ・シトリーが驚いたように俺を見てくる。

「俺が誰だろうとお前等には関係ないのこどだ。そんなことより早くここから離れろ。」

「それは出来ないわ! アイツをどうにかしないと学園が大変なことになる。私達でも相手にならないのよ! 貴方には無理よ!」

軽く注意をしたというのにリアス・グレモリーは突つかかかってきた。

「そうだな、お前たちには無理だろう。悪魔おまえたちにはな。」

「な、何故貴方がそのことを!!？」

「うるせえな、さっさと離れろってんだよ!!」

俺はリアス・グレモリーに向かって殺気を放ち、もう一度だけ注意する。

「そ、そうはいかないわ!私はこの地を魔王様から任されているのよ!」

「お前等あくまにはあの怪人ソディアーツを倒すことどころかダメージを与えることすら出来ねえよ。」

そう、神が言っていた通りこの世界で怪人を倒すことが出来るのは今のところ唯一の仮面ライダーである俺だけ。

俺が来る前にリアス・グレモリーとソーナ・シトリーが戦っていたようだが、リンクス・ゾディアーツには一つも傷を負わせきれていなかった。

それどころか全線で戦っていたであろう、木場裕斗、塔城小猫、仁村留流子、巡巴柄、由良翼紗の五人が大きな傷を負い、息も絶え絶えになっていた。

後方にいた女王と僧侶も魔力が無くなりかけているのか肩で息をしていた。

「そんなのまだ分からないじゃない...。」

「まだ分からねえのか?お前等がどれだけの時間を戦ったかは分からんが怪人ソディアーツとそこの五人を見比べたらどっちが優位か直ぐに分かる。」

「それでも、魔王様から任されている以上私が何とかしないと!」

「対した力もないくせに吠えんじゃねえよ!俺が怪人ソディアーツを倒すから良いだろうがよ。学園は守ってやるって言ってんだよ!」

「あ、貴方が...?」

「ああ、だからお前等は離れて結界に力を注いでろ。」

「わ、分かったわ!皆ここから離れて!ソーナも早く!」

「ええ!貴方達聞こえましたね!結界に集中しますよ!」

「「「「「はい!!」」」」」」

ようやく俺の言うことを聞き、ここから離れ結界をより強固なもの

にした。

「さて、一丁やりますか！」

仮面ライダーバースの伊達さんみたいな感じで気合を入れる。

今の俺の形態はブランクモード、つまり一番能力の低い形態だ。

「シヤアアー！」

俺とアイツ等の会話に痺れを切らしていたのかリンクス・ゾディアーツは俺に攻撃を仕掛けてくる。

直線状の攻撃だった為、横に避けざまに首に手刀を打つ。

地面叩きつけられたリンクス・ゾディアーツはしばらく動いていなかった。

いくらゾディアーツでも人間を模してある以上急所は似ている。

割と力を入れ、深く手刀を入れたため余計にダメージは大きいだろう。

「ちと早いがこれで終わらせてやるよ。」

カードデッキからファイナルアタックライドのカードを取り出しクレセンバイザーに読み込ませる。

「ファイナルアタックライド!! ク、ク、ク、クレセント!!!」

「ライダーパンチ。」

右手に力を溜め、リンクス・ゾディアーツの腹にライダーパンチを打とうとした瞬間横から衝撃を受ける。

「ガハッ!!」

衝撃により吹き飛ばされた俺は近くにあった木にぶつかる。

「いてえな、誰だ?」

俺は衝撃が来た方向を見ると別の怪人がいた。

「アイツは確か、グロンギのズ・バザー・バだったか?」

ズ・バザー・バはリンクス・ゾディアーツを抱え上げると、リアス・グレモリーとソーナ・シトリー達が展開した結界を突き破りこの場から立ち去った。

俺もそれに気をひかれている悪魔達に気付かれぬようにこの場から立ち去る

## 接触と火蓋

「リンクス・ゾディアーツに、ズ・バザー・バか……」

リアス・グレモリーとソーナ・シトリー達がズ・バザー・バに気を取られている隙に急いでリアス・グレモリー達から離れ変身を解き、さつきまでの事について頭を悩ませていた。

神からこの世界に怪人達が転送され現れることは事前に聞いていたがゾディアーツにグロングと異なる怪人が一緒に現れるなんて考えもしなかったし、ズ・バザー・バがリンクス・ゾディアーツを助けたことも意外だった。

「異なる怪人が助けあう……か。」

考えられる可能性は、何者かが組織を結成しそこで怪人達をまとめているという事だ。

それならばトップで考えられるのは、神が言っていた邪神の存在だ。

邪神が怪人達をまとめ上げ、このハイスクールD×Dの世界を征服しようとしているとも考えられる。

「取りあえず、一度神に確認したほうがよさそうだな。」

あとは、多対一の戦いになることを想定してのトレーニングも必要だ。

今まではトレーニングルームの機能を使い一対一の戦闘を行ってきたが、今の状況を見ると多対一の戦況になる事がかなりの確率で起きるだろうからな。

一対一の戦闘になれば普通怪人レベルならまともに戦えることがリンクス・ゾディアーツとで確認できたからな。

「まあ、それは家に帰ってから行うにしろ、今はアイツ等との関係をどうするかだ。」

仮面ライダークレセントとしてアイツ等と初めて対面したわけだが、アイツ等は俺のことを監視するだろう。

戦闘後に襲われでもしたら勝てる見込みは低くなる。

また、戦闘後に帰る際に尾行でもされ正体がバレてしまえば最悪倒

されるかよくて保護対象かりアス・グレモリーかソーナ・シトリのどちらかの眷属悪魔化だろう。

別に眷属悪魔化はまだ良いが、俺が眷属悪魔になる代わりに本来眷属悪魔になる奴が眷属悪魔に成れないという事が起きればそれは俺自身が困る。

ただでさえ正史のルートから離れて行っているのに余計に離れるのは俺が対処するのに手間取ってしまう。

「なら、先に手を打っておくか……。」

俺はすることを決め、もう一度クレセントに変身した。

### 第三者 side

先程まで怪人達と戦闘が行われた場所で事故処理に追われていたりアス・グレモリーとソーナ・シトリとその眷属悪魔達。

事後処理をしながらも皆考えは別のことを考えていた。

自分達の目の前にいきなり現れ、自分達では傷一つすら負わせることの出来なかった謎の相手をあと少しまで追い詰めた謎の男。

見た目は自分の兄である魔王が好きな特撮のヒーローの強化スーツに身を包み、頭部に三日月を模したような装飾のある者。

声から察すると男なのだが、聞き覚えのない声だった。

「リアス、貴方は先程の者について何か知っていますか？」

「ソーナ、私はあまり知らないわ。貴方は？」

「心当たりが少しあります。」

「教えてちょうだい。」

ソーナ・シトリは少し考える素振りを見せ、自分の眷属悪魔とリ



アス・グレモリーの眷属悪魔を呼ぶ。

「では、話しましょう。その前に一つ聞きます。リアス、貴方達がここ一年で大公から依頼されたはぐれ悪魔をどれだけ討伐しました？」

「朱乃、どれぐらい討伐したかしら？」

「依頼されたのは八件ですが、実際に私達が討伐したのは四件だけですわね。残りは既に倒されているか、到着して時には重症の状態でしたわ。」

「こちらも貴方達と同じようなものでした。疑問に想った私は眷属と使い魔に調べさせたところ全てに共通して先程の謎の者が関わっていました。」

「それは本当なのソーナ？」

「ええ、近くの防犯カメラも調べたら映っていましたから、真実性はあると思えます。」

「防犯カメラまで調べたの？」

「少し、そういったことに精通しているお得意様が居ましたのでお願いしてみましたところよく快諾してくれましたよ。」

眼鏡を少しかけなおしながらそういうソーナ・シトリー。

「別に隠しているつもりはなかったんだがな。」

「貴方はっ!？」

「さつきぶりだな、リアス・グレモリーにソーナ・シトリー。それに二人の眷属悪魔達よ。」

---

三日月大河 side

まだあの場に居ると思いきやクレセントに変身した状態で戻ると、思ってた通り事後処理をしていたリアス・グレモリーにソーナ・シトリー

達が居た。

ちやうど俺の話をしていたようなので割って入る。

しかし、ソーナ・シトリーがお得意様を使って防犯カメラまで調べていたのはビビったが。

「別に隠しているつもりはなかったんだがな。」

「貴方はっ!？」

「さつきぶりだな、リアス・グレモリーにソーナ・シトリー。それに二人の眷属悪魔達よ。」

それぞれの主人を守るかのように前に立つ眷属達だが、さつきの戦闘でのダメージがひどく残っているらしくその動きは遅い。

「おいおい、別にお前等と戦いに来たわけじゃないんだ。そんなに身構えるな。」

戦闘の意思が無いことを示すため手を上にあげプラプラとする。

しかし、まだ疑っているようで身構えている。

「貴方に戦闘の意思がないようですが、正体の分からない相手に警戒を解くなどというのが無理でしょう。」

ソーナ・シトリーが俺にそう言ってくる。

「ま、正論だな。まあいい。このままでいいか。」

「それで貴方は何しに来たのかしら？」

オーラを少し流し、俺にプレッシャーをかけながら問いかけてくるリアス・グレモリー。

「話をしにきたんだよ。お前等とな。」

「話をですって？」

「ああ、話をしに来た。なんだ駄目なのか？」

「いえ、こちらとしても貴方とは一度話してみたいと思ってきましたが……。」

歯切れの悪いような回答をするソーナ・シトリー。

「正体不明の者と話すのは……ってことか？」

「はい、どうやら貴方には私達で手も足も出なかったあの謎の生命体について知っているようですし、貴方には謎の生命体にダメージを与えられるようですので。警戒するしかありませんし。」

「それに貴方は私達が悪魔であること知っているようだし。余計に警戒するわよ。」

「なるほどねえ。ならどうすれば話をさせて貰えるんだ？」

「あら？それなら簡単よ。貴方が私達に正体を見せればいいわ。」

少し高圧的な態度になるリアス・グレモリー。

「おいおい、それは少し調子に乗ってねえか？」

「なら、力づくで貴方から聞いても別に私としてはいいのよ？」

「リアス！」

「確かに相手は私達の知らない力をもっているようだけど、相手は一人よ。私の眷属と貴方の眷属が力を合わせれば拘束出来るかもしれないわよ？」

「けれど、私達が力を合わせても傷一つすら与えれなかった謎の生命体を追いつめたのですよ！」

「ソーナ？私達は魔王様からこの地を任されているのよ。なら正体不明の相手は倒すか、拘束するしかないわ。」

「はあ、リアス。貴方って人は。。。いいでしょう私達も力をかしましょう。」

「ふふ、ありがとうソーナ。」

「いい？私の可愛い下僕達、敵は正体不明の謎の力をもってるわ。十分に気をつけなさい！」

「貴方達、聞きましたね。油断してはなりませんよ！」

「「「「「はい！」「「「「「」」」」」」」

二人の主人の命で俺に攻撃を仕掛けてくる眷属悪魔たち。

こうなったら俺もやるしかない、そう思い俺はあるライダーのセリフを言い放った。

「さあ！シヨータムだ！」

## クレセントの力の片鱗

「さあーシヨータイムだー！」

俺はその掛け声と共に前に詰める。

今の俺の形態はライダーモードで、トレーニングルームの機能での計算上は戦車<sup>ルック</sup>三人までなら一度に相手に出来、スピードでも平均的な騎士<sup>ナイト</sup>よりは遥かに早い形態。

数はリアス・グレモリーにソーナ・シトリー側が多いが向こうはさっきのリンクス・ゾディアーツとの戦闘ダメージが残っているため、数の利は無いに等しい。

それに加え俺はスペック的に勝っているのに加え、日々トレーニングルームで戦闘訓練をしている。

更によれば手負いの相手から倒していけば俺はほとんどダメージを負うことなく勝てる。

すなわち、今回は俺の多対一の戦況に慣れるための実践練習のようなものだ。

「せいぜい、長く持ってくれよう？」

バイザーをソードモードに変え、右手に握り近くまで接近していた木場裕斗に切り付ける。

「くっ！」

木場は魔剣創造で出した魔剣で防ごうとしたが一番ひどくさっきのリンクス・ゾディアーツとの戦闘のダメージが多かったため動きが鈍かったため、一撃で倒せた。

どうやら俺の予想よりも大きなダメージを受けていたようだ。

次にソーナ・シトリーの兵士<sup>ポーン</sup>である仁村留流子にクレセントソードの柄で殴る。

「きゃー！」

その後一端眷属悪魔達から距離を取り、リアス・グレモリーとソーナ・シトリー達に向かいもう一度問いかける。

「二応今のお前達じゃ俺に敵わないってことが証明できたと思うけど、まだ続けるか？」

「裕斗をこんな目に合わせてこのまま引き下がれる訳ないじゃない！」

「留流子……。貴方の敵はかならず。」

「いやいや、なんか俺が悪者のような流れになっちゃってるけど事の発端はお前等が仕掛けたからな？」

「そう心で突っ込みながらもまだ話し合いに応じてくれるようではないので、クレセンサーをクレセンガンに変えいまだに俺に接近しようとする塔城小猫、巡巴柄、由良翼紗に向けてトリガーをひき銃弾を浴びせる。」

「俺自身がガンモードに変身できればいろんなタイプの銃弾を使え分けれるんだが、ライダーモードでは普通の銃弾しか撃てない。(普通と言っても特殊な金属を使ってあるため生身で当たれば無傷では済まない)」

「……単なる銃弾なら効かないはずなのに！」

「どうなっているんだ！」

「痛みが……。凄い！」

「戦車の二人は銃弾の威力に驚き騎士ナイトは防御力の弱さでおおきなダメージを受けた。」

「この銃弾はちよつと特別でな。さっきの怪人ソディアーツやグロンギ達にも効くようなものだからな。お前等には余計に効くだろう？」

「小猫！無事かしら!？」

「巴柄！翼紗！大丈夫ですか!？」

「リアス・グレモリーとソーナ・シトリーが眷属を庇うように立つ。」

「許さないわ！私の可愛い下僕をよくも！」

「あーら、うふふ。おいたをする方はお仕置きをしなければいけませんわね！」

「リアス・グレモリーは消滅の魔力を、姫島朱乃は雷を右手に集め始めた。」

「貴方達、持てる魔力を全て相手にぶつけなさい！」

「ソーナ・シトリーは水の魔力を、眷属悪魔達は多種多様な魔力を練り始めた。」

「これは、俺も全力でいかなきゃならねえか。」

カードデッキからファイナルアタッククライドのカードを取り出しクレセンバイザーガンモードに読み込ませる。

〈ファイナルアタッククライド…〉

「この技はまだ加減できねえから、気を付けろよ?」

「気を付けるのは貴方の方よ!」

「覚悟しなさい!」

その言葉を皮切りに消滅の魔力、雷、水の竜、火、土など自分の全力を出してきたとわかるような威力の攻撃が飛んでくる。

〈ク、ク、クレセント!!!〉

「ライダーバースト。」

銃口に集まった高エネルギーをライダーバーストとの掛け声と共に開放する。

放たれた攻撃と高エネルギーは中間地点でぶつかり合い激しい爆発を起こした。

大きく巻き起こった砂煙が立ち込める。

### 第三者 side

激しい爆発を起こした両者の攻撃。

立ち込める砂煙の中リアス・グレモリーとソーナ・シトリー達は膝立ちをし、肩で大きく息をしていた。

その姿からはいつもの優雅さは無く、ただ全力で魔力を使い切った、そんな様子だった。

「これで、ハアハア、倒せたでしょう。」

「ええ、ハア、流石に今の攻撃を食らえば…。」

リアス・グレモリーとソーナ・シトリーは敵を倒しと思いきや油断している。

だが、二人は気付いていない。

砂煙の中で聞こえる一つの機械音が流れていると…。

そう、きつきの攻撃は相打ちだったのだ。

クレセントに攻撃は一才通ってはいなかったのだ。

へカメンライド：：ライオト、ルーパー！！

「まだ、終わってないぜ？」

砂煙がはれ、リアス・グレモリーとソーナ・シトリー達の前に現れたのは無傷のクレセントと三体のライオトルーパーだった。

「うそ、無傷だというの：：!？」

「あれほどの攻撃を喰らったというのに!？」

リアス・グレモリーとソーナ・シトリー達の表情には絶望で埋まっていた。

## 成立と三度

俺のファイナルアタックライドとリアス・グレモリー、ソーナ・シトリー達の全力の攻撃は相打ちに終わった。

砂煙が立ち込める中、リアス・グレモリーとソーナ・シトリーが戦闘の中では言っではいけないフラグを立てていた。

ここで別に俺一人で戦闘を続けてもよかったのだが、これからの話を俺有利に進めるためとライダーを呼び出すのを慣れておきたかった為、ライオトルーパーを召喚した。

するとリアス・グレモリー、ソーナ・シトリーの表情は絶望に染まっていた。

「で、どうする？まだ戦闘を続けるか？それとも話し合いに応じてくれるか？」

「ここまで力の差を見せられて抵抗するほど私は馬鹿ではありません。話し合いは私としてもやっておきたかったので……。」

「いいわ、ソーナの意見に乗るわ。」

素直に負けを認めこちらの要求に応じてくれるソーナ・シトリーに対し、今だに高圧的と言うか戦闘前といった態度の変らないリアス・グレモリー。

「なら、明日の放課後に生徒会室でお前等待つとけ。俺がそちらに向こう。」

「分かりました。準備をしてお待ちしておきます。」

「しっかりと納得のいく話をしてもらうわよ。あと、このことは魔王様に伝えさせて貰うから。」

「勝手しておけ。それじゃあな。」

俺はこのまま猛スピードで用務員室に戻り、帰りの支度をして家に帰る。

「しかし、アイツ等は状況を見る事が出来ないのかね？うる覚えの原作知識では少なくともソーナ・シトリーの方は頭が切れると思っていただがな……。」

もう十分に暗くなったころ、今日の夕飯と明日の朝飯の食材の買い



物に向かっていているさなかに今日感じた怪ズ・バザー・バ 人の気配がした。

「本日三度目の戦闘かよ!!」

急ぎクレセントライダーモードに変身し気配のする方向に行く。

気配がある方向に近づくとつれ怪ズ・バザー・バ 人の気配のほかにもう一つの気配が微量にだが感じる。

「(これは…、悪魔の気配か…。)」

今日に感じた事のある悪魔、微量にしか感じれないため断言できないがおそらく木場裕斗だろう。

多少なりと剣の音も聞こえる。

「くっ！僕一人でどうにかある相手じゃないのに！」

ここにきてようやく木場裕斗の声が聞こえた。

弱弱しく、今にも息絶えそうな声だった。

「つたくよ！せっかく帰れると思ったのによ！」

クレセントバイザーをガンモードに変え、木場裕斗にとどめを刺そうとしているズ・バザー・バに銃弾を撃ち込む。

「ビガラ、バビロボザー！」

ズ・バザー・バが何かを言っている。

「(確か、これはグロンギの間で使われる特別な言語!)」

グロンギ語には特別な変換方法があったが、一々覚えていないがなんとなく感覚で覚えている。

「ドゴシグガシンバレンサギザザザ！」

一応通りすがりの仮面ライダーだ、って言うてみたが実際に伝わっているかわからない。

「バレンサギザザザ？バンベギバギ、ボボゼダゴゴグ。」

「ジャデデリソジヨ、バゲシグヂビギデジャスゼ！」

その声と共にズ・バザー・バは空高く跳び、俺めがけて攻撃してきた。

一瞬カウンターを喰らわせようかと思ったがそれは直ぐにやめた。

高い所から急降下するんだ、相当な威力をふくんだ攻撃だ。

俺は訓練はしているが身体能力は一般人より強い程度でしかない。

怪人集団グロンギのなかでは弱い部類であるズ・バザー・バでも俺が攻撃をく

らえば無事ではない。

「なら、一番はこうするしかない！」

急降下してきているズ・バザー・バの右足めがけて銃弾を複数回撃ち込む。

俺がとる手段は同じ箇所を何度も攻撃することだ。

ズ・バザー・バはバツタに近い能力を持っている。

強靱な肉体、もっと言えば凄まじいまでに進化した両足がズ・バザー・バの力の秘密。

そこを重点的に狙い、ダメージを与え続けられズ・バザー・バの力を封じることが出来る。

だが、そんなに簡単なことではない。

何度も攻撃し続けられれば相手だって馬鹿じゃない限り気づくだろうし対処だつてしてくる。

「ビガラバレデギスバ！ゴバジバギョゾベサギズズベスバソ！」

「あー、もう！グロンギ語は疲れるっての！」

いい加減グロンギ語を喋るのに疲れた俺は一気に攻めるためカードデッキからカードを二枚取り出す。

〈カメンライド… ライオト、ルーパー！！〉

〈カメンライド… オルタナティブ！！〉

「時間を稼いでくれよ！」

ライオトルーパー三体と、仮面ライダーオルタナティブを召喚しズ・バザー・バと戦わせる。

その間に俺は傷だらけで今にも息絶えそうな木場裕斗のそばに向かう。

「さっさと立って主のもとに帰れ、木場裕斗よ。」

「あ、貴方は放課後の…。」

「話はあるけど、今はここから離れろ！」

「あ、はい…。」

ゆっくりとだが立ちあがり、魔法陣を展開してこの場から居なくなる木場裕斗。

「さて、これで必殺技を撃っても被害は最小限に抑えられるだろう。」

カードデッキからファイナルアタックライドのカードを取り出しクレセンバイザーに読み込ませ、右手に力を籠める。

「いくぜ、ズ・バザー・バをよー!」

ライオトルーパー達抑えられ身動きが取れない状態のズ・バザー・バの体の中心部めがけて走り出す。

「あばよ、ズ・バザー・バ。」

ズ・バザー・バの眼前に立ちそっくりい腰の回転を使い力を籠めていた右手を心臓部に撃ちこむ。

「ライダーパンチツ!!」

ライダーパンチを心臓部に喰らったズ・バザー・バはいくつかの木を貫通しながら吹っ飛んでいった。

吹っ飛んでいったズ・バザー・バのところに急いで向かうとまだ倒れてはいなかった。

「まじかよ!?倒れていないのかよ!」

もう一度ライダーパンチを撃ちこもうと構えたがそれは直ぐにやめた。

「なんだ、これは...。」

腰に付けていた何も紋章のなかったガイアメモリが点滅し始めたのだ。

そしてそれに呼応するかのようにズ・バザー・バの体も点滅する。

スーツと俺の腰からガイアメモリが離れズ・バザー・バの体に吸い込まれていった。

ガイアメモリが全てズ・バザー・バの中に入った瞬間に大きな光が放たれた。

「な、なんだってんだ!?!」

あまりの眩しさに思わず目の部分を隠し、光を遮る。

体感時間にして三十秒から一分って位たっただろうか。

光が収まりズ・バザー・バが倒れていたところをみるとそこにズ・バザー・バはいなかった。

ただそこにあるのはズ・バザー・バの紋章が入った一つのガイアメモリだった。

## メモリと会談

ズ・バザー・バとの戦闘が終わり本来の目的であった食材の買い出しを済ませ家に帰りつく。

ズ・バザー・バ倒し放課後の借りを返し気分が晴れると思っていたが今の俺の心の中は疑問で埋め尽くされている。

確実に倒すためにオルタナティブをとライオトルーパーを召喚しズ・バザー・バを拘束したうえでライダーパンチを心臓部に打ちこんだ。

確かに打ちぬいた感触があったが倒すことが出来なかった。

そしてもう一度ライダーパンチを打ちこもうとした時に俺の疑問の、悩みの為が起きた。

以前に手に入れていた何も紋章のなかったガイアメモリと、死にかけのズ・バザー・バと共鳴し発光した。

そして光が収まった時にはズ・バザー・バの紋章が入ったガイアメモリに変化し、落ちていた。

俺がこのハイスクールD×Dの世界に来て一年たったが、今までこんなことはなかった。

神にこんなことがあるとも聞いたことがなかった。

「こいつは一体なんなんだよ、ったく…。」

左手にスーパーパーのレジ袋を持ち、右手にズ・バザー・バのガイアメモリを空に掲げながら俺はそうつぶやく。

ガイアメモリのスイッチ部分を押しと『ズ・バザー・バ!!』と鳴り響く。

「本来ならスイッチを押した後に体にある生体コネクタに挿しドーパント化するんだろが…。」

そもそも俺には生体コネクタは存在しないし、ズ・バザー・バは分類上別の怪人<sup>グレロンギ</sup>。

だがガイアメモリは、「地球上に今までに存在し、地球が覚えた事象の記憶を抽出・封入している」という設定であり、今までのドーパントのモチーフや能力にほとんど縛りが無かった。

また、古生物などの記憶を持ったガイアメモリも存在していた。それ等を考えるとこのズ・バザー・バも地球の記憶として封入されているとも考えられる。

「つてことはこのガイアメモリを使い俺や他の人間達もズ・バザー・バドーパントに変異することが可能つてことになるか…。」

だが生体コネクタがない状態でドーパントに変異すればその代償があった。

「だとしたら今はコレを気軽に扱っていいものじゃないな。つとどうこうしている内にもう着いたか。」

どうやらズ・バザー・バのガイアメモリについて考え事をしているうちに自宅についたようだ。

「さて、明日もあるし軽く夕飯を作り風呂入つて寝るか。」

そう思いさつきスーパーで買った食材を冷蔵庫に入れつつ今日の夕飯の食材を調理台に並べているとスマホに着信が入る。

普段使っている表向きのスマホではなく神から貰った特別なスマホの方に。

「ああ、神か。丁度よかったあんたに聞きたいことがあつたんだ。」

『多分それは今から私が話すことで解決すると思うわ。』

「そうか、なら手短に話してくれ。明日面倒なことが起きそうなんだな。」

『それは多少見ていたから分かるわ。まあこちらも後がつまっているから手短に話すけど。要件は分かると思うけど怪<sup>ズ・バザー・バ</sup>人とそのガイアメモリについてよ。』

「このズ・バザー・バの紋章が入ったガイアメモリについて何か知っていることがあるのか？」

『そうね、なぜズ・バザー・バがガイアメモリに記憶として封入されたかのロジックは分かかっていないけど、そのガイアメモリも使う方法は分かっているわ。あとライダーカードの別の使い方についても。』

「そのライダーカードの別の使い方についてもすごく興味があるが、まずはこのガイアメモリの使い方を教えてくれ。」

俺の覚えている限りでは、セールスマンと呼ばれる売人からガイア

メモリを購入し専用の機械で体に生体コネクタを刻み初めてガイアメモリは使えるはずだ。

もしくは園咲の家の人間が使用していたガイアドライバーと呼ばれた生体挿入フィルターを使う、もしくは左さんが使っていたロスドライバー、Wの使っていたダブルドライバーでしか変身は出来ないはず。

ガイアドライバーにしるロスドライバーにしる俺は持っていない為、現状ではガイアメモリを使うことは不可能なはずだ。

『貴方の考えていることは正しいわ。確かに今の貴方はガイアドライバーもロスドライバーも持っていないわ。』

「ならばどうするとうんだ？」

『それは簡単なことよ。無いのなら創ればいいだけよ。』

確かに神の言う通り無いのなら創ればいいが、俺が創れる訳が無い。

創造の神やガイアメモリに関する専門的な知識をもった人間ならまだしも、そういつた知識や力のない俺が創れる訳ない。

『別に貴方が創る必要はないわ。』

「は？ならどうやって創るって言うんだ？」

『貴方のベルトは昔創造の神が仮面ライダーにはまってその場のノリで創ったってのは言ったわよね？』

「ああ、それは前に説明されたが……。」

『で、その創造の神がまた性懲りもなくノリであるモノを創ったのよ。』

「あるモノ？」

『ええ、そうよ。まあ実際に見てもらった方が話が早いから一度トレーニングルームに向かってちょうだい。』

神にトレーニングルームに行くように促された俺はキッチンから移動し、言われた通りトレーニングルームに着くとそこには見た事のない不思議な機械が置いてあった。

少なくとも機能最後に戦闘訓練したときはなかったものだ。

おそらく、いやほぼ確定でこれが創造の神が性懲りもなくノリで

創ったモノなんだろう。

『これが創造の神が創った機械よ。またノリで創ったとはいえ神の作品は神の作品。その性能は凄まじいわ。』

創造の神が創った機械は、見た感じ仮面ライダーフォーゼのラビツトハッチにあつたアストロスイッチを調整する機械に似ていた。

フォーゼの機械と異なるのはスイッチを入れる部分のほかに形的にメダルやメモリを入れるようなところなど、歴代の仮面ライダーが使用した変身ツールを入れられそうなどころがある点だ。

『これに正確な名前は無いから適当に呼んでいいわ。で、この機械の性能は単純よ。＜機械に入れた変身ツールをそれに適したベルトもしくはドライバーを創りだす＞よ。』

俺は神の言った言葉に驚いていた。

＜機械に入れた変身ツールをそれに適したベルトもしくはドライバーを創りだす＞、それは今持っているズ・バザー・バのガイアメモリをあめ機械に入れれば、ガイアメモリに適したベルトかドライバー、即ちガイアドライバーかロストドライバーが創り出されるってことになる。

『で、ライダーカードの別の使い方についてもここに繋がるのだけど、それは言わなくても分かるわよね？』

「もちろんだ。」

ライダーカードの別の使い方、それはこの機械を使いカードに記されたライダーのベルトかドライバーを創り出すことだろう。

そうすれば一度クレセントに変身してから別のライダーに変身しなおすする必要がなくなるということだ。

「ただ、この機械は簡単に使うことは出来ないだろうか？」

『ええ、そうよ。ベルトもしくはドライバーを創り出す為の対価としてそつちの世界でのお金とベルトの素材の代用品としてセルメダルや金属類が必要よ。』

「金とセルメダルか金属類か……。」

『ベルトやドライバーによるけどだいたいお金は何百万単位で必要になるし、セルメダルなら少なくとも十枚は。金属類ならば種類によつ

て必要な量は変わってくるわ。』

現在俺の所持金は用務員としての給料で一年間働きボーナスも含めて五百万。

駒王学園はだいぶ、というかすごいほど給料が高く（マンモス校なだけあってその分仕事もきついが）俺の懐は温まっている。

セルメダルは相変わらず十枚で、金属類に関してはあの人に頼めば何とかなるだろう。

『そろそろ私は次のことがあるから電話を切るけど最後に言っておくわ。一番安いライオトルーパーのベルトを創り出すにはお金が九十五万円程度で、セルメダルでは八枚いるわ。』

「そうか、教えてくれてありがとな。」

『別にお礼を言われる事ではないわ。仕事だもの。それじゃね。』  
「おう。」

神との通話を切り、俺は急いで家の金庫に金をとりに行った。



## 創造と力

「さてと、これでライオトルーパーのベルトを創り出すの必要なものはそろったか。」

神との通話の後に急いで近くのコンビニを複数まわって金を下ろしに行った。

初め銀行に行こうと思ったが時間遅くに百万近い大金を下ろすと何かしら疑われると思い手数料がかかるが五店舗のコンビニを回った。

一応家の金庫にも金を入れていたがそれはもしものためのことを考えて使うのをやめた。

セルメダルは十枚持っているが念のために金属取扱店を経営している知り合いに頼んで銀、銅、あとマグネシウム合金や鉄、亜鉛などを譲ってもらった。

「確かライオトルーパーのベルトを創り出すには金が九十五万、セルメダル八枚あればよかったな。」

神の言っていたことを思い出しながら金とセルメダルを準備しトレーニングルームにある機械の前に立つ。

説明にあった創り出す機械とは別に割と大きめの液晶ディスプレイとキーボード、マウスがある。

画面には様々な項目があるが俺は迷うことなく創造の項目をクリックした。

「えっと、ベルト、ドライバーの創造の他にタカカンやディスクアニマルなんかのサポートアイテムも創造出来るのか。」

他にも何も紋章のないガイアメモリやゾディアーツ・スイッチ、セルメダルなどのアイテムも創造可能となっている。

これらはベルトやドライバーとは異なり普通に金さえあれば簡単に創造できるようだ。

「まあ、他のアイテムなんかはおいおい調べるにして今はライオトルーパーのベルトを創り出すか！」

俺はワクワクが止まらないで心臓の動機も早くなっていくのが分

かった。

駒王学園では用務員や年上としての立場上口調や態度に気をつけて過ごしていたが実際の俺は童心が今だにあり、新しいことや何かを想像したり、創り出すことがすごく好きな人間だ。

この世界に来る前の世界でもモノ作りの好きがこうじて高校は工業高校へ、工業高校卒業後は就職せずに専門学校に通っていた。

「ん？これは……」

ライオトルーパーのベルトを創り出そうとした俺は一端止めて、ポケットからズ・バザー・バのガイアメモリを取り出す。

今の俺はライオトルーパーのベルトをなしでもクレセントとしてライオトルーパーに変身できるし、呼び出すことも可能だ。

だが一方でズ・バザー・バに関してはクレセントでも変身する事は出来ず、呼び出すこともできない。

自分の戦闘手段や手数を増やすという点で言えばズ・バザー・バに変身できればこれからのことを考えると非常によい。

幸いと言うかガイアドライバーやロストドライバーを創るにはライオトルーパーのベルトより金やセルメダルは必要になるが、生体コネクタを体に刻む専用の機械を創るのはライオトルーパーのベルトを創るよりは遥かに安い。

「生体コネクタ専用機械を創り、俺の体に生体コネクタを刻んでおけば最悪ベルトを捕られた時にも戦う手段を残せるか……」

俺の一番の頼みの綱がクレセントドライバー。

これを捕られてしまえば俺は何も出来なくなるのが今の現状だ。

だが、ズ・バザー・バに変身することが出来れば取り戻すために戦うことが出来る。

「……は専用機械を創っておくか。これからのことも考えて。」

俺はそう考えパソコンにコネクタ用機械を創ることを入力する。

『要望品を確認…… 必要材料と必要経費を投入してください。』

画面に表示された通り現金四十二万円とセルメダル三枚、鉄と銅をそれぞれ五百グラムずつ機械に投入した。

『経費四十二万円の投入を確認…… セルメダル三枚の投入を確認……』

鉄五百グラムの投入を確認・・・銅五百グラムの投入を確認・・・必要経費と必要材料全ての投入を確認しました。これより創造に入ります・・・しばらくお待ちください。』

無事に素材と経費を投入できたようで若干鈍い音を出しながら機械が作動し始める。

『およそ三十分後に創造予定です。』

「三十分か・・・、まだ夕飯を食ってねえし風呂も入ってねえから今のうちに済ましておくか」

俺はそう思い食材をそろえておいた調理台に戻り簡単にであるがオムライスを作り、軽くシャワーを浴びる。

俺は基本的にシャワーで済ませるタイプであり冬にならないと風呂は溜めない。

そうこうしている内に創造が終了したのかピーーっつと音がトレーニングルーム方書くから聞こえてきた。

「できたか!!?」

年甲斐もなく興奮してしまっているが、それも別に気にならないほど俺はワクワクしていた。

急いでトレーニングルームに向かい機械を見ると生体コネクタ専用機械が完成していた。

手に取って確認してみるとしつかりと重厚感があり、テレビで見た通りのデザインだった。

「うおおおおお!!マジに作られただと!!?」

俺はあまりの凄さに興奮を抑えることが出来なかった。

さらに一から作る事のむずかしさを知っているため、こうもこんな簡単に機械一つが出来るか不思議に思ったこともあり思わず叫んでしまった。

こう言つてはあれだが少しだけ本当に作れるかどうか疑っていた。

神の作った物はノリとはいえ本当に凄い物だと強く実感した。

だが他にもやらねければならないので無理やりにも興奮を抑える。

「さて、あとはこれを何処に生体コネクタを埋め込むかだな。」

原作では様々なところに埋め込まれていたが比較的にばれるようなところには埋め込んでいなかった。

俺がズ・バツ・バに変身するのは何らかの理由でクレセントに変身出来なくなった時だろう。

考えられるのは体を取り押さえられた、クレセントドライバーを戦闘によって捕られた時だろう。

そして普段の生活の中でもばれないようにする必要がある。

埋め込むのに一番簡単なのは腕なんだが、簡単と同時に見つかりやすいというデメリットもある。

足に埋め込むと挿すときに一度しゃがまなければならぬ。

原作でもあった舌など特異的な部分では喋るときにばれてしまう。

「となると候補は首うらか胸部が妥当だな。」

首うらであれば基本的に襟付きのシャツを着れば隠すことができるし、髪を伸ばせば更に隠すことが出来る。

胸部だと基本的に夏だろうが冬だろうが服で隠れているし、服をめくられなければばれることはない。

別に海に言ったりプールに入るつもりもないから胸部だと何も問題ない。

「よし、なら生体コネクタを埋め込むところは胸部にするか！」

埋め込むところを決めた俺はズ・バツ・バのガイアメモリを機械に装填し俺の左胸部に照準を合わせる。

「っ!!？」

トリガーをひき生体コネクタを埋め込むと鋭くも鈍い痛みが俺の体を走るか我慢できる程度なのでこらえる。

ある程度の痛みが引き、左胸部を確認してみると原作でも見た事のあるような生体コネクタがしっかりと埋め込まれていた。

「よし、実際にズ・バツ・バに変身してその性能や能力を確かめてみるか。」

装填していたズ・バツ・バのガイアメモリを抜き取り、服をずらし生体コネクタが見えるようにしスイッチを押し挿しこむ。

『ズ・バツ・バ!!』

ガイアメモリを挿したところから徐々に変わっていきものの二、三秒で俺はズ・バザー・バに変身していた。

「おお！感動するー！」

初めてクレセントに変身出来た時と同じような感動を覚えながらも性能や能力を確かめるためトレーニングルームの機能を使いショツカー戦闘員を十体出現させる。

ショツカー戦闘員達はナイフだとかヌンチャクだとかメリケンサックだとかそれぞれ異なる戦闘手段を使うように設定してある。

ズ・バザー・バは全身の筋肉がスプリング状の螺旋構造になっており、「驚異のジャンパー」の二つ名のとおり、マイティフォームではあるがクウガでは手に負えない驚異的な跳躍力を持つ。

また全身が筋肉のため走ってくるバイクを片手で止めたりと腕力も優れている。

ひとまず跳躍力を確認するためそこまで力を籠めず軽くジャンプを試してみると天井にぶつかってしまった。

実践練習を想定して作られているため建物三回程度の高さは余裕であるが25mをゆうに超える跳躍力を持つているため、俺自身では軽くジャンプしたつもりでも過剰な力だったようだ。

「跳躍力の力加減めっちゃめっちゃ難しいな。これは屋内では使わないようにしねえと……。」

ズ・バザー・バは屋内戦ではなく屋外戦でしか使わないと決め、次に腕力などを確かめるため近くまで接近してきていた一体のショツカー戦闘員にパンチを放つ。

俺の放ったパンチはショツカー戦闘員のみぞおち部分に吸い込まれるように当たり、その衝撃でショツカー戦闘員は壁めがけて吹っ飛んでいった。

「……は？」

壁に吹っ飛んでいった事に対して俺は驚きを隠せず情けない声を出してしまった。

以前にも似たような場面があったがその時はクレセントでせいぜい数メートルとんだ程度だったが、その時の倍以上の威力があるとい

うことだ。

クレセントは俺の身体能力が大きくかかわってくるがどうやらズ・バツ・バに変身した場合、ズ・バツ・バそのままの性能や能力が反映されるようだ。

「よしやーこのまま性能や能力を確かめるか！」

その掛け声と共に残り九体のショツカー戦闘員達に向かって走り出した。

## 会談開始

「痛てててっ。全身筋肉痛ってまじかよ……。」

ズ・バザー・バに変身して戦闘訓練少しだけするつもりがあまりのズ・バザー・バの性能の凄さについていやりすぎてしまった。

そのせいで全身のいたるところが行動するたびに痛みが走る全身筋肉痛になってしまった。

どうやらクレセントの時は俺の身体能力+ $\alpha$ で戦っていたのに対しズ・バザー・バの場合俺の体のスペックのままズ・バザー・バの力を使うようで俺のスペックを超える分はその後に反動として俺の体に帰ってくるようだ。

強力な海神の力そのものが一気に手に入る分反動のでかいズ・バザー・バへの変身と体への負担が零に近いがあまり強力ではない力のクレセントによる変身。

どちらに変身するにしても結局のところは俺自身の身体能力とスペックが必要なことには変わりない。

「もつと鍛えないとやばいな。」  
ズ・バザー・バへ変身する度に全身筋肉痛になるんじや最悪だからな。

こういう面で言えば人間以外の種族がうらやましいんだが、人間をやめるつもりはさらさらない。

今俺は駒王学園に通勤している最中なのだが一步一步前に進むたびに体が悲鳴を上げている。

ものすごく今サロンパス（前の世界でのサロンパスにあたるもの）にお世話になっている。

今日は特別、用務員としての力の必要な作業も予定されていない、どちらかと言えば用具とか器具の購入申請の書類書きしかすることはない。

ただ、放課後はそうはいかない。

駒王学園にいる二人の上級悪魔であるリアス・グレモリーとソーナ・シトリーとその眷属悪魔達と会談する予定だ。

色々と二人に言いたいことがあるが今回俺が二人に言うのは三つだけのつもりだ。

あと、向こうからの質問に関しても三つは答えるつもりでもいる。俺も三つで向こうも三つの対等なモノに今はまだしておきたいからな。

そうこうしている内どうやら駒王学園についたらしく俺は用務員室に向かった。

ただ、通勤時間がいつもの二倍以上もかかったことは余談だ。

---

「今日も仕事終わった〜！」

全身筋肉痛に悩まされながらもなんとか仕事を終わらせた。

予定では力を使うような仕事はなかったのに、いきなり窓ガラスが割れたのだの、扉が外れたのだのいつもは無いような仕事に舞い込んできて思わず泣きそうになった。



「さてと、アイツ等のもとに向かうか。」

俺が言っていた通り生徒会室にリアス・グレモリーとソーナ・シトリー達が集まっているようだ。

ただ一つ気になるのが感じた事のない微量な気配がすることだ。

少ししか感じれないが確実にこの学園にいる中で一番強い、もちろん俺なんか足元にもおよばないような強大な気配が。

「アイツ等、確か魔王に報告すると言っていたがまさか魔王がここに来ているとか言わないだろうか？」

魔王がここに来ていたら正直行きたくない。

俺が勝てる訳はないし、もしかしたらズ・バツ・バ状態ならこの世界の異能の力は効かないだろうが（リンクス・ゾディアーツがそうだった。）恐らくそれは望めない。

神が言っていたのは写真の効果で効かなくなったのであって、邪神から離れたらその効果はなくなっていると考えるのが妥当だろう。

試してみないと分からないが、むぎむぎ死ぬかもしれない状況に飛び込むほど馬鹿じゃない。

「気が進まないが、一応アイツ等との約束だからな。」

クレセントに変身、その後オルタナティブに変わり鏡の中に入る。

どうやらこの世界でミラーワールドの滞在時間の制限も無く自由に行き来出来るらしい。ぎんはつのクイーン・オブ・デイバウア銀髪の殲滅女王

その力を使えば一気に生徒会室に行けるというわけだ。

今はまだ俺の正体がばれるのは困るし、クレセントのまま生徒会室に行くのは流石に無理がある。

放課後になったとはいえまだ学園内には一般の生徒立ちも少なからず残っている。

「おっと、ここだな。」

ミラーワールド内の駒王学園の学園内にある生徒会室の鏡の前に辿りつく。

「おいおい、流石に魔王は来ていないけどまさかアイツがいるのかよ。」

ミラーワールドから生徒会室を覗いてみると銀髪でスタイルのよ

いメイド服を来ている悪魔がいた。

グレイフィア・ルキフグス：…ルシファアの名を継いだサーゼクス・ルシファアの女王クイーンにして最強の女性悪魔で銀髪ぎんぱつの殲滅女王クイーン・オブ・ディバウアという異名を持っている。

「完全にこれは無理だわ。俺じゃあまだ勝てない。」

ミラーワールド内で覗いていて、さっそく帰りたくなってきたがりアス・グレモリーが口を開いた。

「それにしてもあの正体不明者はまだこないのかしら?」

「リアス、まだ放課後は始まったばかりですし。」

「お嬢様、私はその正体不明者については報告されたことしか知らないのですが…。」

「そうね、正体不明者がくるまで説明しようかしら?」

なんか偉そうに話しているリアス・グレモリーを見ていたらイラついてきた。

そのオーラがミラーワールドから現実世界にもれたのかグレイフィア・ルキフグスのみが反応した。

「っ???何んですかこの今まで感じたことのない気配は!!」

「どうしたのかしら、グレイフィア?」

「どうしたのですか?グレイフィアさん。」

リアス・グレモリー、ソーナ・シトリー達は気付いていないよういきなり警戒体制になったグレイフィア・ルキフグスに尋ねる。

「お嬢様やソーナ様はお気づきになられていないのですか!?この誰かに見られているような気配を!」

「何も感じないわよ?ねえソーナ。」

「え、ええ。特に何も感じませんが…。」

そろそろミラーワールドからでしょうか?と思ったときグレイフィア・ルキフグスが俺の存在に気付いた。

「鏡の中!」

ミラーワールドにいる俺と目があい俺に向けて殺気を飛ばしてきた。  
た。

「あ、あー。お前たち聞こえるか?」

「「「「え!?!」」」」」

グレイファイア・ルキフグスを覗いた全員が俺の声に驚き各々の得物を構えた。

その表情はひどく固まっていてミラーワールドにもその緊張が伝わってくる。

「昨日ぶりだな。悪魔達。」

「ぎ、昨日の人のなの?」

「ああ、昨日お前達全員を相手に戦って勝った奴だ。まあ今の姿は昨日とは異なるが間違いない昨日の奴だ。」

「皆様方、お下がり下さい。今の皆様では勝てません。」

グレイファイア・ルキフグスはリアス・グレモリーとソーナ・シトリー達を庇うように前に立ち目で確認できるほど濃い魔力を出し俺を威嚇してくる。

「そんなに警戒するなって、俺は単に話をしに来ただけだったの。」

俺は冷静に対処しているように装っているが内心グレイファイア・ルキフグスの濃い魔力に当てられて冷汗が止まらないでいる。

「ならば、私達の前に出てきてください。」

「はいはい。」

グレイファイア・ルキフグスに言われ俺は生徒会室の鏡を通りミラーワールドから現実世界に出る・

「なっ!」「えっ!」

それぞれ驚いた声をだした。

グレイファイア・ルキフグスまでもがそのような声を出したことに俺が逆に驚いた。

「流石に鏡の中から人が現れたら驚くか。」

俺も多分何も知らない状況で鏡の中から人が出てきたら腰を抜かすほどに驚くだろう。

「あ、当たり前よ! 一体貴方何者なのよ!」

「おいおい、いきなり質問かよ。別に答えてもいいけど俺が答えるのは三つまでだ。」

「なんで三つだけなのかしら!?!」

「俺がお前たちに求めるものが三つだからだ。簡単なことだ。俺が求めることに対してお前等が答える。お前等が求めることに俺が答える。その項目をそろえる。ただそれだけだ。」

同じ分のみの関係、それだ一番楽だ。

借りを作らず作らせない。

「ならその三つの中で私達が納得のいく説明をしてもらえるのかしら？」

「さあな。俺は聞かれたことに対して答えるだけだ。」

「さあなつて、貴方ねえ！」

リアス・グレモリーが魔力を漂わせながら俺に詰め寄ってくるがそれをグレイフィア・ルキフグスが止める。

「お嬢様、むやみやたらに威嚇するのはおやめ下さい。あちらに戦闘の意志がない今の内に話をすべきです。」

「グレイフィアさんの言う通りですよ、リアス。こちらから戦いを挑んでも昨日のようになるがおちです。」

「ソーナ様、昨日にこの方と戦ったのですか!? そんな報告は受けておりませんが…。 どういうことですかリアスお嬢様。」

どうやらリアス・グレモリーは怪<sup>グロンギとンディアーツ</sup>人と俺のことしか報告していないようで、俺と戦いそして敗北したことを報告していないようだ。

「ええ、昨日に私達は目の前にいる者と戦いました。結果は私達の完敗でしたが。」

「私達の合体の本気の技も意味を成さなかったわ。」

「この方にそれほどの実力が…。」

グレイフィア・ルキフグスが俺のことを観察してくるが、その威圧感がすごい。

俺に対しての警戒心がMAXと言わんばかりの威圧感が。

「まあ、過ぎたことは置いてきつさと話そうか。こっちもそれほど暇じゃないんでね。」

今日は近くのスーパーで特売が夕方からあるから、出来るだけ急ぎたい。

「なら、先に貴方から要求を言ってちょうだい。」

「俺が求めるの二つ目が、俺に対して必要以上に関わるなってことだ。もちろん俺に監視をつけるとか眷属にしようとするなって意味でな。二つ目が昨日のような奴等が出たらお前等で倒そうとせず結界を張って俺に連絡しろ。お前等では倒せないってのもあるがアイツ等は俺の敵だ。そして最後に金と金属類を俺が望んだときに渡すことだ。」

「二つ目、二つ目分かりますが…。三つ目はどういうことでしょうか？」

ソーナ・シトリーが尋ねてくる。

「俺の実験には金や金属が必要でな。その援助をしてもらいたいだよ。七十二柱に数えられたグレモリー家とシトリー家なら簡単なことだろう？」

「実験とは？」

「詳しくは言えないが、昨日の奴等に有効なモノを作っている。それ以外については企業秘密ならぬ個人情報だ。」

嘘は言っていない。

昨日から作っているからあながち間違っていないからな。

「分かりました。その三つの要求を飲みましょう。」

「理解が早くて助かる。で、お前等の聞きたいことはなんだ？」

「その前に一つ、昨日の異形のモノが出たときにどのようにして貴方に連絡したらよいのですか？」

「これを使えばいいさ。」

俺は机の上にタカカンを置いた。

「これは？」

「さっき言った実験の成果の一つだ。こうすればいい。」

プルタブを開けタカモードにする。

「こいつを飛び立たせたら俺のところへ報告に来るようになってるか  
ら大丈夫だ。」

「凄いですね、冥界でもこんなものは見たことはありません。」

「一つ警告しておくがこいつを下手に調べようとするなよ？俺以外が

弄ろうとすると爆発するから。あとそいつを壊したりすると弁償してもらうぞ。爆発力は昨日の奴等にもそれなりにダメージを与えられるぐらいだ。」

「心に刻んでおきます。」

少し汗を垂らしながらタカカンを手に取るソーナ・シトリー。

「ちよっとーそれは一つしかないのかしら？」

またリアス・グレモリーが割って入ってくる。

「一個あれば十分だろ、お前等同士では連絡できるんだからよ。」

「そんなに言うならこちらは貴方に渡しておきます。リアス。」

「いいわ、私が持つておくわ。」

何故こんなにも上から目線でモノを言えるのかが俺にはわからな  
い。

仮にも俺は昨日アイツを倒したはずなんだが。

そんなことを考えながらも口には出さず、堪える。

「話を戻して聞きたいことなんだ。」

ここからが本番だ。

## 第20話

「さっそく私達の質問……と言いたいですが聞けるのが三つまでのようなので少し身内で話し合いしてもいいでしょうか？」

「あまり時間を取らないなら別に構わん。」

俺からの要求が終わり、次にリアス・グレモリー、ソーナ・シトリー達、悪魔側の質問の時間になったときにソーナ・シトリーがそう言うてきた。

確かに質問が三つまでとはさっき言ったばかりなので俺に多少なりと非があるとも言えるから認める。

ソーナ・シトリーとグレイフィア・ルキフグスの二人が中心に質問内容を決めているようで、リアス・グレモリーは完全に蚊帳の外になっっている。

ところどころでリアス・グレモリーが意見を言っているがことごとくソーナ・シトリーとグレイフィア・ルキフグスの二人に却下されている。

個人的な質問をしようとしているリアス・グレモリーに対し、ソーナ・シトリーとグレイフィア・ルキフグスは本当に重要なことを聞くうとしているようだ。

それから五分ぐらい経過し、俺に質問する内容が決まったようだ。「では、一つ目の質問です。貴方について私達に教えられる限り全て教えてもらえますか？」

「答えはノーだ。で、二つ目は？」

「ちよつと!!ちゃんと質問に答えてないじゃない!」

リアス・グレモリーが突っかかってくるが俺はこう返す。

「いや、俺はちゃんと質問に答えたぞ?」

「してないじゃない!」

「俺は教えてもらえますか?という質問にノー、即ち無理だと答えたんだ。別にそんな聞き方なんじゃ俺がこう答えようが間違っていないんだからな。」

そう、確かに俺は質問に答えた。

今の聞き方じゃ、教えられるか、教えれないと答えたらしい。

だって『教えてもらえますか?』なんだから。

「なるほど、そう返してきますか。確かに質問にはちゃんと答えてますね…。今のは私の質問の聞き方が悪かったようです。」

「へえ、ソーナ・シトリーは気付いたようだな。」

「ええ、確かに貴方はちゃんと私の質問に答えましたね。」

「っ!!なるほど、そういうことですか…。」

ここでグレイフィア・ルキフグスも気付いたようだ。

もっと早くにグレイフィア・ルキフグスは気付くかと思っていたがどうやら俺が鏡から出てきたことで少し思考が遅くなったようだ。

「どういうことよ!」

リアス・グレモリーはまだ分かってないようだ。

「リアスお嬢様、例えばリアスお嬢様に好きな食べ物がありますかと聞かれたらなんて答えますか?」

「あるわ、と答えるでしょうね。」

「でしたら、リアスお嬢様の好きな食べ物はなんですか?と聞かれたらなんて答えますか?」

「それは、——っ!!そういうこと。」

「お分かり頂けましたか?」

「ええ。」

グレイフィア・ルキフグスに説明されてようやく理解できたリアス・グレモリー。

この場面に必要とされるのは質問の聞き方が重要になってくる。

それを先に理解していれば無駄に一つ消費しなくてよかったのだが、それは無理だったようだ。

恐らく普段の三人ならいとも簡単に気付くのだろうが俺の考えた通り驚きのあまり正常な思考回路になれなかったようだ。

「で、二つ目の質問はなんだ?」

「貴方の昨日と今日の姿と力はなんなのかしら?」

「昨日の姿が俺の基本形態のクレセントで、今の姿は派生形態のオルタナティブってところだな。力は対怪人特化にそれぞれ特別な力が



あると思ってくれ。例えば今の姿なら鏡の世界に行ける、とかな。」  
流石に一つ目で意地悪をしたため今回は少し詳しく話した。

「さて、次で最後の質問になるが……、別に質問回数を増やしてやってもいいんだが、どうする？」

ここでさらに俺が優位に立てるように一つ提案をする。

だが無理な提案をしてしまえば向こうも拒否するだろうから可能な範囲かつ、向こうにも十になる提案をする。

「内容によりますね。」

「別にそんなに難しい内容じゃねえよ。一つ欲しい物があるからそれをくれないか？って話だ。」

「貴方の欲する物とは？」

「情報だ、お前等の力と能力の情報だ。」

この世界に来てからずっと考えてきたことがある。

俺の原作知識はどこまであっているのか？……と。

少しでも多くの確証がほしいからな。

「いいわ、なら私から。私の名前はリアス・グレモリー。上級悪魔よ。力は消滅の魔力と言えばいいかしら？」

「私は姫島朱乃ですわ。グレモリー眷属の『女王』<sup>クイーン</sup>ですわ。魔力を使った攻撃が得意で主に雷を使っていますわ。」

「……塔城小猫です。駒は『戦車』<sup>ルック</sup>です。」

それからシトリー眷属の説明も貰ったが俺の知っている知識と俺の変わりも無かった

## 決着と撃破

「それじゃ、情報も教えてもらったところだし約束通りあと二つだ。俺にしていいいぜ？」

グレモリー眷属とシトリー眷属達の能力や駒は俺の知っている原作知識となんも変わりが無かったことに安心しながらも約束のためリアス・グレモリー達に促す。

「でしたら、三つめは私から。」

お次はグレイフィア・ルキフグスがしてくるようだ。

「これだけは魔王眷属としても、一悪魔としてお聞きします。貴方は悪魔陣営の敵ですか？味方ですか？はつきりとお答えください。」

「今のところは敵でもないし、味方でもない。俺はただ怪人達を倒すだけだがもし俺の邪魔をするなら……。」

俺はそこで言葉を切り、すこし殺気を放った。

「今はその回答で満足です。」

スツと、後ろに下がる動作も一つ一つが洗礼された動きで、見ていて惚れ惚れする。

「次で最後だが、誰が質問をする？」

「私が質問するわ！」

リアス・グレモリーが意気揚々と前に出てくる。

「で、内容は？」

「貴方がこの町にいる間だけでも、私達の協力者になってももらえるかしら？」

「そうした場合の俺のメリットは何かあるのか？」

リアス・グレモリーの魂胆は協力者という名目で俺を監視するつもりだろうが、ことのメリット次第ではそれに乗ってもいい。

「そうね、何かあればこの簡易魔法陣を通して願いを叶えるわ。対価はなしでいいわ。」

願いか、今のところは特にないが新しいベルトなんかを作ったときに模擬戦相手にでもなってもらおうか？

対怪人ならトレーニングルームの機能を使えばいいが、対人戦とな

るとトレーニングルームでは無理だからな。

あとといえば、魔力についても知りたいから教えてもらえばいいか……。

「それで、回答は？」

「いいだろう、お前達の協力者なってやるよ。」

「ふふ、ありがとう。（これで協力者という建前で監視が出来るわ。）」

リアス・グレモリーがたくらんだような顔をしているがおおよその検討はついている。

だが、やすやすと監視されるつもりはないのでせいぜいこつちが利用させてもらおうとするか。

俺の仮面の中で口角をあげ笑う。

「んじや、これ以上の会談をする必要はないから俺は帰らせてもらおうぞ?。」

椅子から立ちあがり鏡の中に入ろうとすると、校庭の方から悲鳴が上がった。

「何っ?!」

リアス・グレモリーやソーナ・シトリー、グレイフィア・ルキフグスに警戒の意識がいつてしまっていた為怪人達への警戒がおろそかになってしまった。

「この気配はリンクス・ゾディアーツか!」

「え?!」

この場にいる俺を除いた全員のようにやくリンクス・ゾディアーツの気配に気付いたのか警戒し始めた。

「くそ!もう一般の生徒が襲われているのか!」

生徒会室の窓を突き破り校庭の方に急いで向かう。

「ちよつと!」

ソーナ・シトリーが何か言っているがそんなことはおかまいなしに俺はリンクス・ゾディアーツの前につく。

俺がついた時には何人かの生徒が傷を負い倒れていた。

「きゃ!!」

逃げ遅れた女子生徒がいたのかリンクス・ゾディアーツの次の標的

にされ襲われかけていた。

「くそーこのままじゃ間に合わねえ！」

急いで女子生徒を助けようとするが距離があまりに遠すぎて間に合わない！そう思ったときに女子生徒の前に立ち、リンクス・ゾディアーツにタックルする男子生徒がいた。

「女に手は出させるかよ!!」

リンクス・ゾディアーツのパンチを喰らい吹き飛ばされるが、それでも何度も喰らいつく。

「アイツ…、いや、早く助けないと兵藤が死ぬ！」

そう、リンクス・ゾディアーツと女子生徒の間に入り戦ったのは変態三人組として有名な兵藤一誠だった。

原作でも女を守るために体を、命を張っていった。

それは悪魔になってからだと思っていたが、実際は生来の物だったようだ。

驚いているのは俺だけでなく、助けられた女子生徒も、倒れている生徒たちも普段の兵藤一誠とはかけ離れた姿に驚いていた。

「よくやったぜ、お前。」

「あ、あんたは…。」

傷だらけになりながらも戦い抜いた兵藤一誠のそばまで駆け寄り、女子生徒とともに抱え上げ安全なところまで連れて行く。

「アイツ等を倒すものだ。」

「で、でも！アイツは化け物だ！あんたも早く逃げてくれ！」

「安心してそこでみておけ。」

兵藤一誠と女子生徒達から離れ改めてリンクス・ゾディアーツに向かい立つ。

「さて、昨日ぶりだなリンクス・ゾディアーツよ。今日は倒させてもらうぞ?」

ベルトのカードデッキから一枚カードを取り出しスキャンする。

【ソードベント】

どこからともなく俺の手元にスラッシュダガーが飛んでくる。

「いくぞ！リンクス・ゾディアーツよ！」

スラッシュダガーの柄の部分強く握りリンクス・ゾディアーツに向け走り出す。

リンクス・ゾディアーツも俺を敵と認識したようで爪をときながら俺にとびかかってくる。

リンクス・ゾディアーツは素早い動きと全てを切り裂く爪をつかった戦いをするタイプのゾディアーツ。

前回は不意を突き俺の優位で戦闘を進めたが今回はしっかりと俺をおを認識しているので簡単に倒すことは出来ないだろう。

なにより、俺に対しての憎悪の念が強く感じられる。

殺戮を止められたからか、それとも前回やられたからかはわからないが兎に角俺への感情が強い。

「というか、今この場に倒れているのは全員成績優秀者だ…。」

確か原作でのスイッチャーは秀才と呼ばれる類の人物だが、自身が抱える劣等感から成績優秀な天高生徒を襲い、成績上位者としての立ち位置を保ち続けようとしたはずだ。

この世界に怪人達を送った邪神はまさか原作通りの設定と能力を付与しているのか？

「しやああああ!!」

爪を俺の首元めがけて突き刺して来ようとするが俺は爪の間にスラッシュダガーをはめ攻撃を止める。

「まずは一撃!」

爪にはめていたスラッシュダガーをそのまま勢いよく下におろし切り裂く。

「ぐぎやああああ!!?」

俺が切った手を抑えながら離れるリンクス・ゾディアーツだが、それを許さず追撃する。

「おらおらおら!」

肩を切り、腕を切り、足を切り、俺の持てるすべてを使いリンクス・ゾディアーツを攻撃していく。

どうやら俺は思いのほか生徒が傷つけられたことに対してキレているようだ。

はじめは怪人達による怪我人が出るのは仕方がないことだと割り切ろうとしていたが、俺に出来ないみたいだ。

もともとはこんな性格じゃなかったはずなのに、ライダーになってから俺の性格はどんどん変わってきている。

「しゃ、しゃあああ!!」

全身から煙を出しながらもまだ威嚇をしてくる。

だが、今の俺は完全に倒すまで止まらないだろう。

「これで終わらせる…。」

ベルトからファイナルベントのカードを抜き出す。

【ファイナルベント】

オルタナティブの契約ミラーモンスターであるサイコログを召喚、そしてサイコロダーに変形させ乗り込む。

「くらえ、これがオルタナティブの必殺デットエンドだ!」

サイコロダーをコマのように勢いよく回転させリンクス・ゾディーツめがけて特攻する。

「しゃあああああ!!」

断末魔を上げながらリンクス・ゾディーツは爆発した。

しかし、俺は忘れていた。

特撮のようにライダー関係者と怪人だけではないことに。

「きやあああああ!」

「う、うわわわわ!!」

離れているとはいえ同じ空間にいる兵藤一誠と女子生徒、倒れていた生徒達にも爆発の余波は伝わっていた。

手を差し出し兵藤一誠や倒れていた生徒を起き上がらせようとしたときスピーカーから声が聞こえてきた。

『その不審者!! 貴様は完全に包囲されている!』

あたりを見回してみると駒王学園の出入り口全てにパトカーがとまり、武装した警察官が俺めがけて銃を構えていた。

「(あちゃー、前はアイツ等は人払いの結界を張っていたが今回は張られていなかったか…。)」

『バイクから降り、爆発物を足元に置き、武装を解除しておとなしく投

降しなさい!』

「(爆発物… さつきデットエンドを決めたときのやつか!)」

『聞こえないのか!武装を解除して両手を頭の上に組むんだ!』

「どうやら完全に俺は犯罪者扱いされしまったようだ。」

「(こんなことになるならアイツ等に結界をはるのを頼めばよかったぜ…。)」

心の中で後悔しながらも、俺はこの場から離れるためサイコロダーを消し、近くにある剣道場の鏡めがけて走り出した。

『あ!まて!逃げるつもりか!?!総員突撃!!テロリストをとらえ、怪我人を救出しろ!』

「(テロリスト扱いか…。)」

心の中で泣きながらも俺は鏡をくぐりミラーワールドに入りこの場から立ち去った。

## 第22話

「はあ、今日はここ最近で一番疲れたぜ…。」

リンクス・ゾディアーツを撃破したかと思えば、今度は警察に追われた。

ミラーワールドに入り警察官から逃げたはいいが気分は最悪だ。

前は先についていたリアス・グレモリーかソーナ・シトリーのどちらかが張った人払いの結界のおかげで俺についてがばれなくて良かったが、今回は人払いの結界がなく思いつきり大勢の人達にばれた。

ちらつとしか見てなかったが警察の後ろに報道陣と思われるカメラをもった男やリポーターと思われる女も多数いた。

それ等のせいで全国にばれてしまった。

「はあ…。」

今日何度目か分からないため息を吐きながら俺はテレビをつけた。

『さて、次のニュースです。今日五時過ぎに全国有数のマンモス校である駒王学園に不審な人物が現れました。』

つけたテレビ番組はその日一日に起きた出来事をまとめて伝える全国放送のニュース番組だった。

そこには駒王学園に不審者が現れたというニュースでがつつり俺（オルタナティブ状態）が映っていた。

『警察によりますと五時過ぎに同じ内容の110番通報が多数入り駆けつけたところ駒王学園のグラウンド付近に武装した不審者がいたようです。不審者は爆発物も所持していると伝えられ駒王学園内でも大きな爆発を起こしたようで、怪我人も多数出ております。』

次に流れたのは至る所に傷を負った駒王学園の生徒達の姿だった。『しかしこれは警察の見解で、その時駒王学園内にいた人達に取材を行ったところ「不審者が来る以前に化け物が現れた」と皆話しており実際に映像もあります。独自入手です。』

モザイクがかけられ取材映像が流れた後に、リンクス・ゾディアーツが生徒達を襲い怪我を負わせている映像だった。



『皆さん！これはCGではありません！実際に起きた出来事です！現在流れている映像のほかにも映像はあります！』

様々な角度から映されたリンクス・ゾディアーツの姿。

中には手振れのあるものや撮った人物の声などが入っているがそれらはどれもCG映像なんかではなかった。

『この映像の続きをご覧下さい！ノーカット無編集でお送りいたします！』

リンクス・ゾディアーツが女子生徒を襲おうとしたところ、そこに兵藤が入り怪我しながらも女子生徒を助けたところ、リンクス・ゾディアーツが追撃を仕掛けようとしたところ…。

そして俺がゾディアーツと二人の間にはいり助けたところ、サイコログを呼び出しファイナルベントであるデットエンドを決めリンクス・ゾディアーツを倒し大爆発したところと一部始終どころか今日のこと全てが放送された。

『この映像が有名動画投稿サイトにアップされたところ僅か一時間で百万回閲覧されました。この映像を見た人達はこの不審者——いえ、救世主を「正体を仮面に隠したヒーロー」、「バイクに乗った仮面の戦士」等と呼びネット上では「仮面ライダー」と呼ばれています。』  
「仮面ライダー」… 当然というべきか、必然というべきか本当の名で広まっている。

『この映像を見た人の中には小学低学年以下の子供も多くおり、「仮面ライダーになりたい！」「仮面ライダーかっこいい！」などその影響は子供たちにも広がっています。』

『こわーい怪人？なのかな！怪人を倒して皆を守る仮面ライダーつてすごい!!』

『だよなだよな！ヒーローだよな！』

町にいた子供にインタビューしたのだろうか、テレビに映った子供達は無邪気で憧れを宿した目で元気よく喋っていた。

『しかし、中には仮面ライダーのことを「テロリスト」、「大量殺傷犯」、「新宗教の創始者」などと言う人もいます。』

『いや、普通に考えてあんなタイミングよく化け物みたいな奴と生徒

お間に入るとか無理っしょ？あらかじめ話し合っていたとしか思えないっしょ？ぜってーテロリストだろ。』

顔も隠し声を変えてそう喋る人が今度は映される。

『今はまだヒーローなのかテロリストなのかは分かりませんがこの事件は今後も注目されそうです。では明日の天気を伝えて貰いましょう。佐藤——』

俺はそこでテレビを切る。

正直俺はひどいバツシングを受けると思っていた。

理由はなんにあれ学園内で爆発させたのも事実だし、それによって怪我人もでた。

テロリストや犯罪者などさんざんに言われる覚悟もしていたし、されるような事もした。

だが、実際はバツシングは少なく俺の行いを誉めてくれたりしてくれた。

そして子供達の純粋な目に純粋な言葉。

それが俺の心にスツと溶け込み、そして押し掛かった。

仮面ライダー、それは昔から人々の平和と笑顔の為に戦ってきた英雄<sup>ヒーロー</sup>でこの世界に転生してくると同時に俺が背負った使命であり宿命。

クレセントに変身したあの時から仮面ライダーとして生きていくことを覚悟した。

なんと言われようとかまわない、そう俺は覚悟した。

「覚悟、した、はずなのに…。」

涙が俺の意志とは関係なしに流れていく。

「こんなにも重いのか…!?!」

目には見えないなにかが、俺の背中に重く押し掛かる。

何も無いはずなのに俺はその重さで一切動けない。

そのまま倒れてしまおうか？そう思ったときに俺の目の前が明るく光った。

『その程度で私達の名を語ろうと言うのか？その程度の重<sup>プレッシャー</sup>圧で何も出来なくなるのか？』

「い、一号ライダー…。」

俺の目の前に現れたのは最初で最強の伝説の仮面ライダー、仮面ライダー一号だった。

『お前が重いと思っっているものは私達が背負い、受け継いできた仮面ライダーの魂』とも言える大切なモノだ。』

「仮面ライダーの、魂…。」

『それは私達への期待と憧れ、そして人々の笑顔を守るといふ仮面ライダーの使命の形だ。』

「…。」

『お前が「仮面ライダー」をこれからも名乗り私達——いや、俺達仮面ライダーの末席に座ると言うのなら仮面ライダーの魂を背負い人々の為に戦い続ける。その重<sup>プレッシャー</sup>圧が嫌だというのなら今すぐライダーベルトを俺に渡せ!!!』

「——う…。」

『なんだ？聞こえんぞ！』

「俺は戦う！人間として！ライダーとして！クレセントとしてええええ！」

確かに〈仮面ライダーの魂〉は重い、重すぎる。

本当なら俺みたいな半端者が背負うような簡単なモノではない。

だが、それでも俺は逃げるわけにはいかない！

神にクレセントドライバーを貰ったからではない。

仮面ライダーの世界に片足を入れたからではない。

「ただ、人々を守り、〈仮面ライダーの魂〉を背負ったからにはこの世界は俺が守る!!ただそれだけだ!!!」

『ふっ、いいだろう！お前はこれから「仮面ライダー」の一員だ！お前の覚悟を見せて貰った！』

一号ライダーはそれだけいうとどこかに行ってしまった。

それと同時に俺の意識もなくなった。